

井尻 B 遺跡 28

—井尻 B 遺跡第 45 次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1438 集

2022

福岡市教育委員会

井尻B遺跡 28

—井尻B遺跡第45次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1438集



調査番号 1957
遺跡略号 IGB-45

2022

福岡市教育委員会

序

古くから玄界灘を介して大陸との交流が絶え間なくおこなわれ、文化交流の門戸として発展を遂げてきた福岡市には、歴史的遺産が数多く残されています。近年の著しい都市化により失われるこれらの文化財を後世に伝えることは、本市の重要な責務です。

本書は、共同住宅建設に伴う井尻B遺跡第45次発掘調査について報告するものです。この調査では弥生時代から古墳時代初めにかける集落の遺構、古墳時代中期の古墳を検出しました。これらは地域の歴史の解明のためにも重要な資料となるものです。今後、本書が文化財保護に対する理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究の資料としてもご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、株式会社新出光様をはじめとする関係者の方々には発掘調査から本書の作成に至るまでご理解とご協力を賜りました。心から感謝申し上げます。

令和4年3月24日

福岡市教育委員会

教育長 星子 明夫

例　　言

1. 本書は南区井尻 5 丁目 234 番 10 の共同住宅建設に先立って福岡市教育委員会が実施した井尻 B 遺跡第 45 次調査の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査と整理報告は三浦悠葵が担当した。遺構の実測は三浦、遺物の実測は三浦・井上加代子、遺構・遺物の写真撮影、製図は三浦・井上、編集・執筆は三浦が行った。
3. 本書で示す座標は、世界測地系を使用している。
4. 方位記号は磁北を示す。
5. 遺構の略号は、以下の通りである。
S C : 壓穴建物跡 S B : 掘建柱建物跡 S P : 柱穴・ビット
6. 掃図の縮尺は、各図に添付したスケールで示す。写真図版の縮尺は全て任意である。
7. 土器の実測図では、断面によって以下のように種類の違いを示した。
弥生土器・土師器・埴輪 □ 須恵器 ■
8. 各調査の出土遺物や実測図、写真などの記録類は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵、保管する予定であるので、広く活用されたい。

遺跡名	井尻B遺跡	遺跡登録番号	0090	分布地図番号	25
次数	45	調査番号	1957	略号	IGB-45
調査面積	326.9m ²	期間	2020年1月14日～2020年3月31日		
調査地	福岡市南区井尻 5 丁目234番10				

目 次

I.	はじめに	1
1.	調査に至る経緯	1
2.	調査の組織	1
II.	遺跡の立地と環境	2
III.	調査の記録	5
1.	調査の方法と経緯	5
2.	調査の概要	5
3.	遺構と遺物	5
(1)	竪穴住居	5
(2)	掘立柱建物	10
(3)	井戸B 2号墳	13
IV.	まとめ	33
1.	大型掘立柱建物 (SB 002)	33
2.	井戸B 2号墳	33
3.	小結	34

挿図目次

- 第1図 周辺の遺跡 (S = 1/25,000)
第2図 調査区配置図 (S = 1/500)
第3図 井尻B遺跡調査区位置図 (S = 1/5,000)
第4図 遺構配置図 (S = 1/125)
第5図 S C 001 (S = 1/40)
第6図 S C 001出土遺物 (S = 1/4)
第7図 S C 002 (S = 1/40)
第8図 S C 003・S C 004 (S = 1/40)
第9図 S C 003出土遺物 (S = 1/3)
第10図 S B 001 (S = 1/40)
第11図 S B 002 (S = 1/80・土層断面は1/40)
第12図 S B 002出土遺物 (S = 1/4)
第13図 井尻B 2号墳 (S = 1/80・土層断面は1/40)
- 第14図 井尻B 2号墳周溝出土遺物① (S = 1/4)
第15図 井尻B 2号墳周溝出土遺物②
(S = 1/4・鉄器は1/2)
第16図 井尻B 2号墳出土 墓輪① (S = 1/4)
第17図 井尻B 2号墳出土 墓輪② (S = 1/4)
第18図 井尻B 2号墳出土 墓輪③ (S = 1/4)
第19図 井尻B 2号墳出土 墓輪④ (S = 1/4)
第20図 井尻B 2号墳出土 家形埴輪① (S = 1/4)
第21図 井尻B 2号墳出土 家形埴輪② (S = 1/4)
第22図 井尻B 2号墳出土 犀形埴輪① (S = 1/4)
第23図 井尻B 2号墳出土 犀形埴輪② (S = 1/4)
第24図 井尻B 2号墳出土 犀形埴輪③ (S = 1/4)
第25図 井尻B 2号墳出土 その他の埴輪 (S = 1/4)

図版目次

- P L . 1
(1) 1区全景 (北西から)
P L . 2
(1) 2区全景 (北西から)
P L . 3
(1) S C 001 (東から)
(2) S C 002 (東から)
(3) S C 003 (西から)
(4) S C 004 (北から)
(5) S B 01 全景 (東から)
(6) S B 02 全景 (北から)
(7) S P 012・013・015・016 検出状況 (東から)
(8) S P 041 挖方と柱痕 (東から)

- P L . 4
(1) S P 041 土層断面 (西から)
(2) 作業風景 1区検出 (東から)
(3) 作業風景 (北から)
(4) 1区周溝内花崗岩検出状況 (北西から)
(5) 1区周溝埴輪検出状況 (南東から)
(6) 2区周溝埴輪検出状況 (北から)
(7) 犀形埴輪検出状況 (北から)
(8) 家形埴輪 83 検出状況 (北西から)
P L . 5
(1) 出土遺物①
P L . 6
(1) 出土遺物②
P L . 7
(1) 出土遺物③
P L . 8
(1) 出土遺物④
P L . 9
(1) 出土遺物⑤

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、同市南区井尻 5 丁目 234 番 10 における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会を令和元年 8 月 2 日付で受理した（事前審査番号 2019-2-497）。これを受けて埋蔵文化財課事前審査係は、申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である井尻 B 遺跡に含まれていることから令和元年 8 月 29 日に試掘調査を実施した。試掘調査の結果現地表面下 60cm 遺構を確認したことから、遺構の保全等に関して申請者と協議を行った。その結果、埋蔵文化財への影響が回避できないことから、建物建設部分について記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。その後、令和元年 11 月 14 日付で株式会社新出光を委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、翌令和 2 年 1 月 14 日から発掘調査、令和 3 年度に資料整理および報告書作成をおこなうこととなった。

2. 調査の組織

調査委託：株式会社新出光

調査主体：福岡市教育委員会

（発掘調査：令和元年度・資料整理：令和 2・3 年度）

調査総括：文化財活用部埋蔵文化財課	課長	菅波正人（元～3 年度）
	同課調査第 2 係長	大塚紀宜（元年度）
		藏富士寛（2・3 年度）

事前審査：	同課事前審査係長	本田浩二郎（元・2 年度）
		田上勇一郎（3 年度）
同課事前審査係主任文化財主事	田上勇一郎	（元・2 年度）
同課事前審査係文化財主事	森本幹彦	（3 年度）
	山本晃平	（元年度）
	三浦悠葵	（2・3 年度）

調査担当：	同課調査第 2 係文化財主事	三浦悠葵（元年度）
-------	----------------	-----------

庶務：文化財活用課	管理係長	藤川己（元年度）
		大森秋子（2 年度）
		石川あゆ子（3 年度）
管理係	松原加奈枝	（元・2 年度）
	井手瑞江	（3 年度）
	内藤愛	（3 年度）

II. 遺跡の環境と立地

井尻 B 遺跡は、福岡平野の中央部を北流し博多湾に注ぐ那珂川と御笠川の間にのびる低丘陵上に立地する。この春日丘陵には奴国王の王墓地と推定される須玖岡本遺跡があり、井尻井遺跡、五十川遺跡、那珂遺跡、比恵遺跡と連なり博多湾に至る。井尻 B 遺跡は江戸時代に国学者の青柳種信が記した「筑前國續風土記拾遺」の那珂郡井尻村の条によって初めて言及される。文中には「村の東南藤崎人家の後を大塚と云う、塚有」や「百姓惣吉という者の塚の際より鎧範を掘り出せり」、「古瓦多く出る。昔大寺など有し跡なるべきか」とあり、銅矛鋲型や古墳、井尻庵寺などの遺跡について触れている。この後には中山平次郎によって甕棺や廐寺関連の報告がなされ、以降昭和 56 年から福岡市教育委員会によって調査が続けられている。令和 3 年度時点ではこれまでに 51 地点で調査が実施されている。

井尻 B 遺跡で最古の生活痕跡は後期旧石器時代に遡り、遺構は伴わないものの第 2・11・12・37 次調査では細石刃やナイフ甲子石器、石核等が出土している。縄文時代の遺物や明確な遺構は現時点で報告されておらず、第 6 次調査で時期不明の土坑に縄文時代の可能性が示唆されたのみである。再度人々の活動が確認されるようになるのは弥生時代以降であり、弥生時代早期には台地の北西端で夜白式・板付 II 式の土器が見られるようになる。また後世の遺構への混入だが、第 45 次調査でも刻目突帯文土器片が出土しており、遺跡全体に弥生時代前期の痕跡を見て取れるようになった。弥生時代中期には散漫であるものの貯蔵穴群や甕棺墓、竪穴住居跡等が散見されるようになる。多くの調査地点で当該期の土器が出土することから、本来は遺跡の広範囲に集落域が広がっていたと考えられるが、住居跡の残存状況から既にある程度の削平を受けている可能性が指摘されている。弥生時代後期には竪穴住居跡、掘立柱建物跡を主体として遺跡全体に濃密な遺構分布を示すようになる。また、遺物では第 6・11・17 次調査で小型彷彿鏡や銅鏡といった青銅器や青銅器・ガラス鋲型、取瓶や埴輪等製作に関わる遺物が出土しており、遺跡内に製作工房をともなう拠点的な集落の様相を示すようになる。古墳時代初頭になると急激に遺構が減少し、これ以降集落は断絶する。再び活動の痕跡が見られるのは古墳時代中期後半に井尻 B 1 号墳が造営されて以降である。井尻 B 1 号墳は第 2・5 次調査によつて径 25 m の円形の墳丘をもつ事が明らかとなつており、前方後円墳の可能性も指摘されている。また、古墳の立地から前述の「筑前國續風土記拾遺」に記載された「大塚」である可能性が示唆されている。第 45 次調査では 1 号墳から 175 m 北西で後続する井尻 B 2 号墳を検出しており、遺跡南側では古墳時代中期後半の墓域の展開が少しづつ明らかとなっている。その後古墳時代後期の遺構は見られないものの、6 世紀後半から 7 世紀に掘立柱建物を中心として集落の展開が散漫ながら再開する。7 世紀後半から 8 世紀前半には第 1・3・17 次調査で古代瓦、第 11 次調査で「寺」のヘラ書きを有する須恵器皿等を出土しており、主に遺跡中央から北半において寺院や官衙施設の存在が指摘されている。

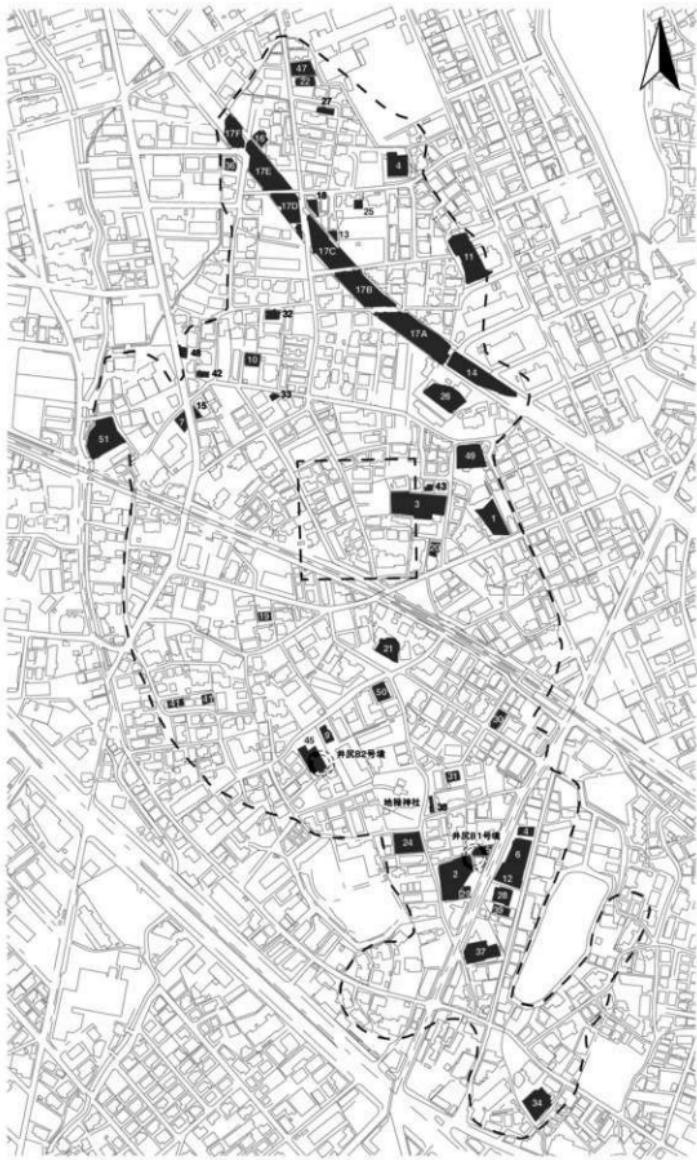


1. 井尻B遺跡 2. 諸岡A遺跡 3. 五十川遺跡 4. 那珂遺跡群 5. 那珂君体遺跡 6. 板付遺跡
 7. 諸岡B遺跡 8. 高畠遺跡 9. 笹原遺跡 10. 三筑遺跡 11. 麦野A遺跡 12. 麦野B遺跡 13. 麦野C遺跡
 14. 井相田A遺跡 15. 井相田C遺跡 16. 仲島遺跡 ● 45次調査地

第1図 周辺の遺跡 ($S = 1 / 25,000$)



第2図 調査区配置図 ($S = 1 / 500$)



III. 調査の記録

1. 調査の方法と経緯

調査区は廃土処理の都合上第2図のように東西に分け、西側を1区、東側を2区として調査を実施した。1月14日に機材搬入と重機による1区の表土掘削を行い、3月3日まで1区を精査した。3月4日から5日に1区の埋め戻しと2区の表土掘削を行い、大型建物の続きを確認するため3月18日に1区と2区の間の部分を拡張した。拡張箇所の遺構は掘り上げず、遺構上面での確認に留めたため、現在も遺構は土中に保存されている。3月29日まで2区の精査をし、30日には埋め戻し、機材搬出を行い全ての調査を終了した。調査は後述する鳥栖ローム層までを重機で掘削した。

2. 調査の概要

45次調査区は井尻B遺跡の中央やや南側に位置する。調査地北東側では9次調査が行われており、南東側には地縁神社が隣接する。現況地形は平坦で、地表面は標高約13.7mを測り、地表下20~50cmで鳥栖ローム層を検出した。2区拡張部分の古墳周溝付近では鳥栖ローム層の上層、地表面下-10cm前後に黒褐色土が堆積しており、この上面から古墳周溝が掘り込まれていることを確認した。その他は鳥栖ローム層上面で遺構を検出した。鳥栖ローム層はおおむね客土直下で検出しており、後世の造成による地形の改変が見て取れる。主な遺構は弥生時代終末期の大型掘立柱建物、古墳時代前期初頭の竪穴住居、古墳時代中期後半の古墳である。遺物は弥生土器、土師器、須恵器、鉄器、埴輪を中心コンテナケース50箱ほど出土した。

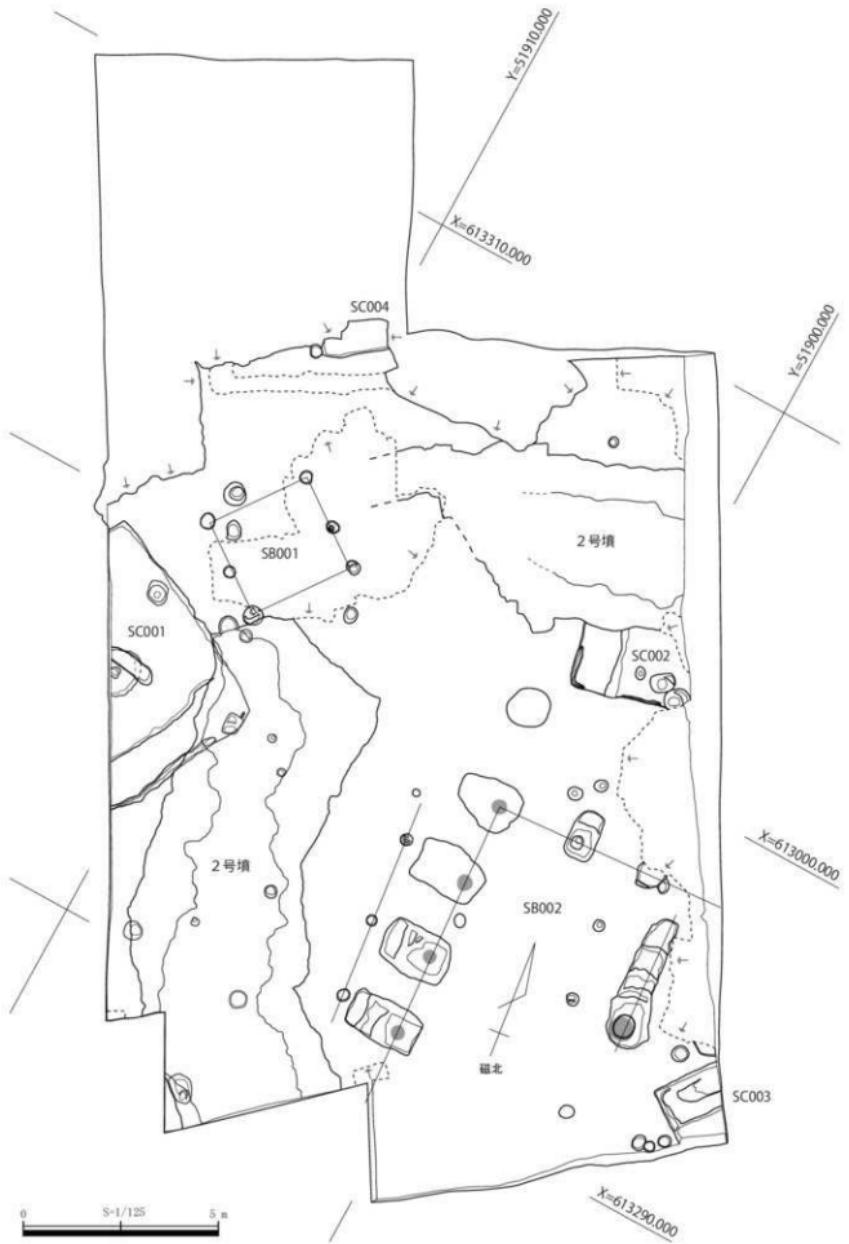
3. 遺構と遺物

1) 竪穴住居 4棟の竪穴住居跡を検出した。

SC001 (第5・6図)

調査区西側で検出した方形の竪穴住居である。東側は古墳周溝に切られる。34°東偏し、北東辺600cm、南西辺の検出長434cmを測る。1回の建て直しがおこなわれており、最初の建設時の規模は北東辺526cm、南西辺の検出長404cm、深さは低床部まで26cmを測る。低床部中央に炉を配し、南東辺に貼床によって南に幅75cm、高さ5cmのベッド状遺構を有し、北東・南東辺に幅約15cm、深さ約10cmの側溝をめぐらせる。建て直しの際は北東辺を約74cm、南西辺を約30cm拡張する。ベッド状遺構には更に厚さ6cmの貼床を足すことで、南に幅110cm、高さ13cmの新たなベッド状遺構を設け、北東・南東辺に幅約20cm、深さ約13cmの新たな側溝をめぐらせる。全体を拡張した際新たな貼床を施したのはベッド状遺構のみである。床面は2面あり、4層と6層の上面でそれぞれ焼土を検出した。

遺物は覆土から甕や高杯などの土器が出土した。床面直上で遺物の出土はない。遺構の埋没時期は古墳時代前期初頭である。



第4図 遺構配置図 (S = 1/125)

遺物

1～3は高壺。1は3層から原形を保った状態で出土した。復元口径19.4cm、器高13.4cm、復元脚部径12.7cmを測る。脚部に径9mmの円形スカシを有する。2はベッド状遺構上層の埋土内から出土した。復元口径18.6cmを測る。外面を目の細かいミガキによって調整する。3は5層から出土した。4は甕。口縁部のみの小片であり、刻目突帯文を有する。

SC002（第7図）

調査区東側で検出した方形の堅穴住居である。北側は古墳周溝に切られる。住居はほぼ磁北を向き、南辺の残存長314cm、西辺の残存長223cm、深さはベッド状遺構まで6cm、低床部まで20cmを測る。西側に幅106cm、高さ15cmのベッド状遺構を有し、南辺と西辺には部分的に幅約15cm、深さ約5cmの側溝をめぐらせる。地山削出しによってベッド状遺構と低床部、浅い側溝を作り、全体に厚さ3～5cm程の貼床を施す。特に低床部の貼床は薄く、住居東側には殆ど貼床が見られない箇所もある。遺物は土器の小片がわずかに見られるのみであり、遺物から遺構の時期の判別はできない。

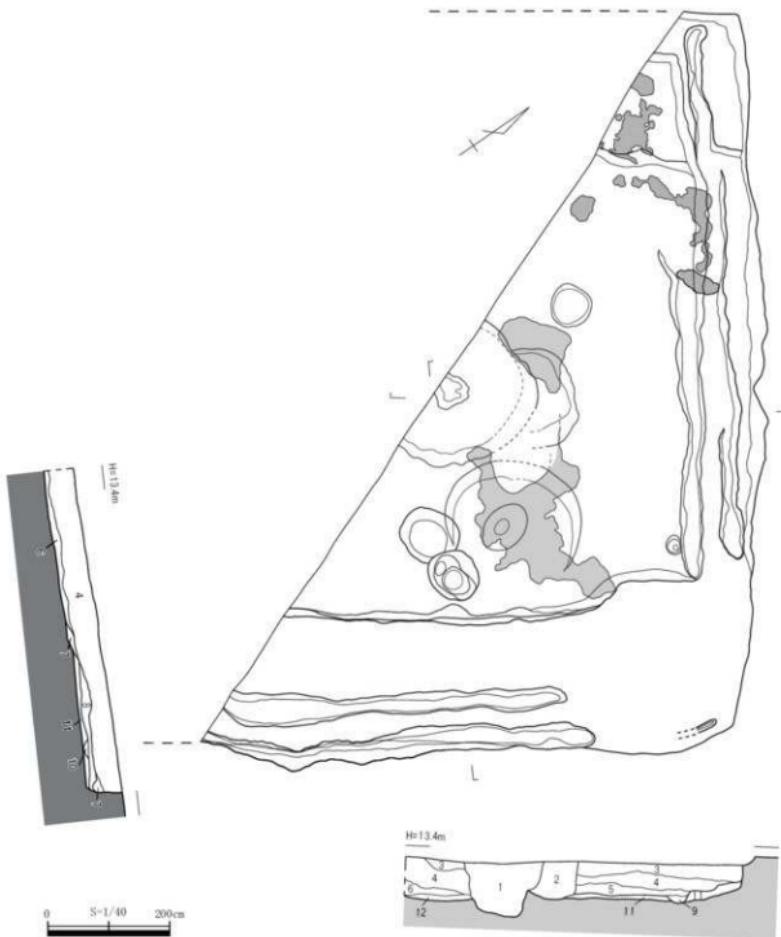
SC003（第8・9図）

調査区南東側で検出した方形の堅穴住居である。35°東偏し、西辺の検出長179cm、北辺の検出長178cm、深さはベッド状遺構まで21cm、低床部まで45cmを測る。北側に幅112cm、高さ24cmのベッド状遺構を設け、西辺から北辺にかけて幅23cm、深さ12cmの側溝をめぐらせる。ベッド状遺構上面には検出長115cm、幅45cm、深さ38cmの土坑が見られる。土坑はベッド状遺構上面から掘り込まれており、粘性の強い暗褐色粘質土で一挙に埋まる。地山削出しによってベッド状遺構と低床部、側溝を作り、貼床は見られない。

遺物はベッド状遺構・低床面から3cm程浮いた状態で高壺・甕等多数の土器が廃棄されていた。これらは全て破碎しており、南側の壁際で出土した甕（第9図5）はほぼ完形で出土した。高壺・甕等は全て破碎している。遺構の廃絶時期は古墳時代前期初頭である。

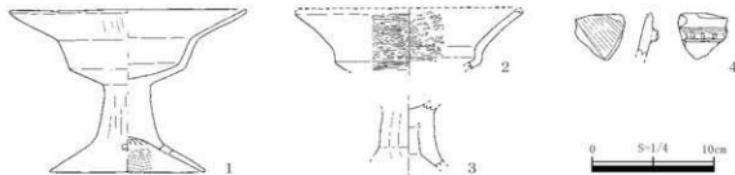
遺物

5・6は壺。5は低床部直上に横倒しになった状態で出土した。胴部最大径25.8cm、残存高31.4cmを測る。肩部と体部下半に突帯がめぐり、外面全体をハケにより調整する。内面は所々にケズリの痕跡が残る。口縁は上半で屈曲するが稜線は不明瞭で底部は尖り底である。6は南側の埋土から出土した。復元口径21.6cm、復元頸部径13.6cmを測る。口縁は上半で屈曲するが稜線は不明瞭である。外面をハケとナデ、内面をハケにより調整する。7～9は甕。7・8はベッド状遺構上面の土器集積箇所から出土した。7は底部がやや丸みを帯びた尖り底で、外面をハケとケズリ、内面をハケにより調整する。8は復元口径22.4cmを測る。9は南側の埋土から出土した。復元頸部径12.0cm、復元体部最大径27.2cmを測る。外面をハケ、内面を口縁を横方向のハケ、体部を工具によるナデとハケにより調整する。10は短頸壺。低床部から出土した。復元口径15.0cm、体部最大径20.2cmを測る。外面を縦方向のハケ、内面を口縁から肩部にかけて横方向のハケ、以下を強いナデ・ケズリにより調整する。11・12は鉢。11は南側の埋土から出土した。復元口径23.0cm、残存高12.3cmを測る。底部は尖底であり、外面体部をハケとナデ、底部付近をケズリ、内面はハケにより調整する。12は南側の埋土から出土した。復元口径11.8cm、器高5.8cmを測る。13はミニチュア土器。ベッド状遺構上層の埋土から出土した。復元口径7.6cm、器高2.9cmを測る。14・15は高壺。14は5等と共に低床部から3cmほど浮き、破損した状態で出土した。残存高14.5cm、脚部径15.4cmを測る。脚部に

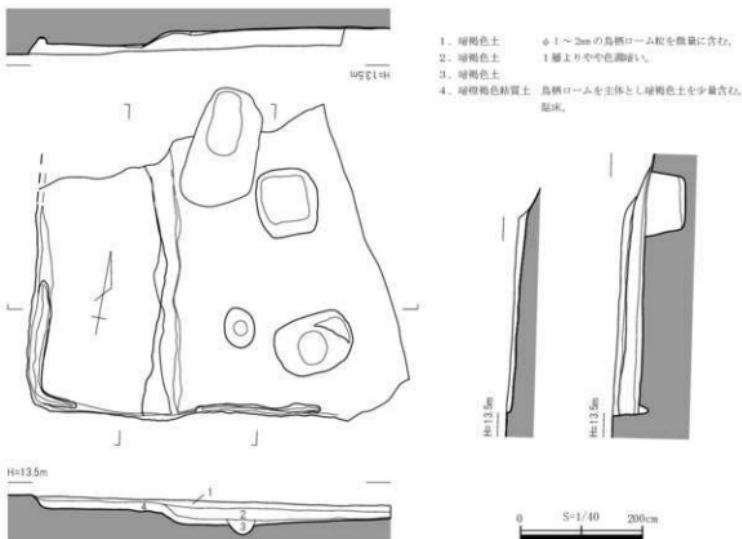


1. 増徳色土
2. 増徳色土 $\phi 5\text{ mm}$ の鳥柄ローム粒を少量含む。
3. 黒褐色土 $\phi 1\text{ mm}$ の鳥柄ローム粒を微量に含む。
4. 黑褐色土 $\phi 10\text{ cm}$ の増徳色土をまばらに含む。
5. 黑褐色土 住居 1 面の側溝埋土。
6. 増徳色土 $\phi 0.5 \sim 1\text{ mm}$ の鳥柄ローム粒をわずかに含む。
7. 増徳色土 住居 1 面の側溝埋土。層 2 よりやや色調が明るい。 $\phi 2 \sim 3\text{ mm}$ の鳥柄ローム粒を少量含む。
8. 増徳色粘質土 住居 1 面の底床。鳥柄ロームに増徳色粘質土・黒褐色土が中量混ざる。
9. 増徳色粘質土 住居 2 面の側溝埋土。鳥柄ロームに増徳色粘質土・黒褐色土が中量混ざる。
10. 増徳色土 住居 2 面の底床。鳥柄ロームに増徳色粘質土・黒褐色土が少量混ざる。
11. 増徳色粘質土 住居 2 面の底床。鳥柄ロームに増徳色粘質土・黒褐色土が中量混ざる。
12. 増徳色土 既跡の埋土であり埋土を中量含む。

第5図 S C 001 (S = 1 / 40)



第6図 SC 001 出土遺物 (S = 1 / 4)

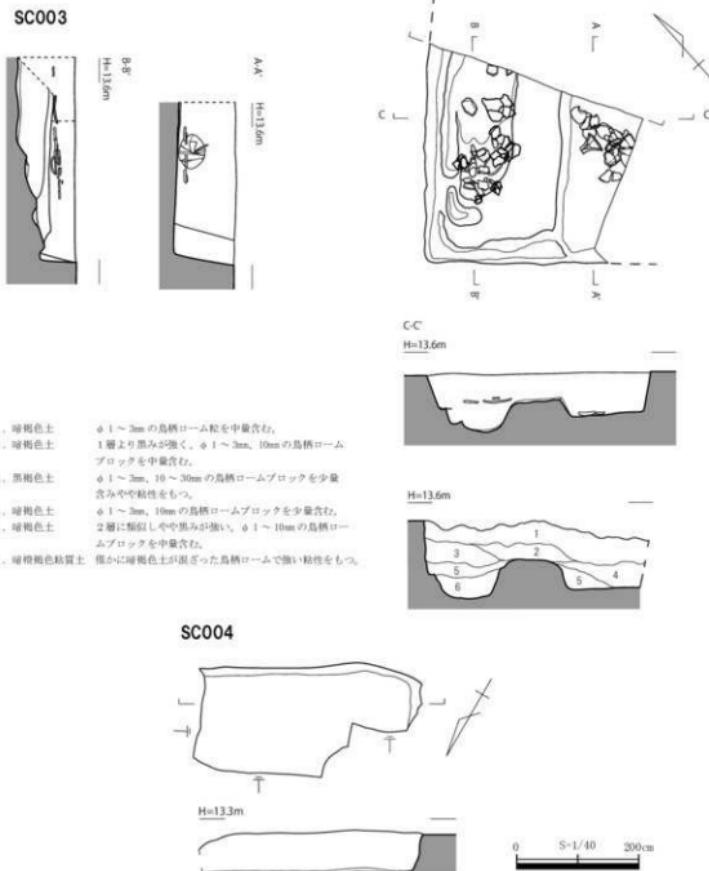


第7図 SC 002 (S = 1 / 40)

径8mmの円形のスカシ孔を有する。15は脚部のみ残存し、残存高13.6cm、脚部径16.4cmを測る。
径8mmの円形のスカシ孔を有する。外面を目の細かいハケの後細かいミガキにより調整する。

SC004 (第8図)

調査区北西側で検出した方形の竪穴住居である。60° 西偏し、西辺の残存長88cm、南辺の残存長168cm、深さ30cmを測る。貼床は見られない。遺物は土器の細片のみであり、遺物から時期の判別はできない。



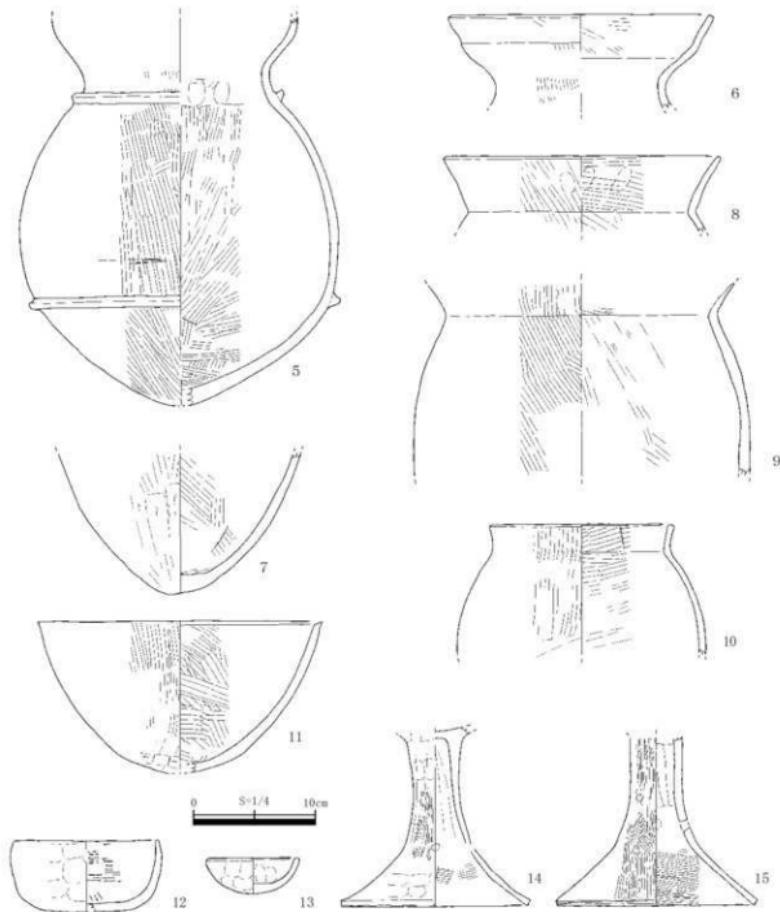
第8図 SC 003・SC 004 (S = 1/40)

2) 挖立柱建物 2棟の掘立柱建物を検出した。

SB001 (第10図)

調査区北西側で検出した1間×2間の掘立柱建物である。36° 東偏し、行2.6m、桁行2.7m、床面積約7.02 m²を測る。

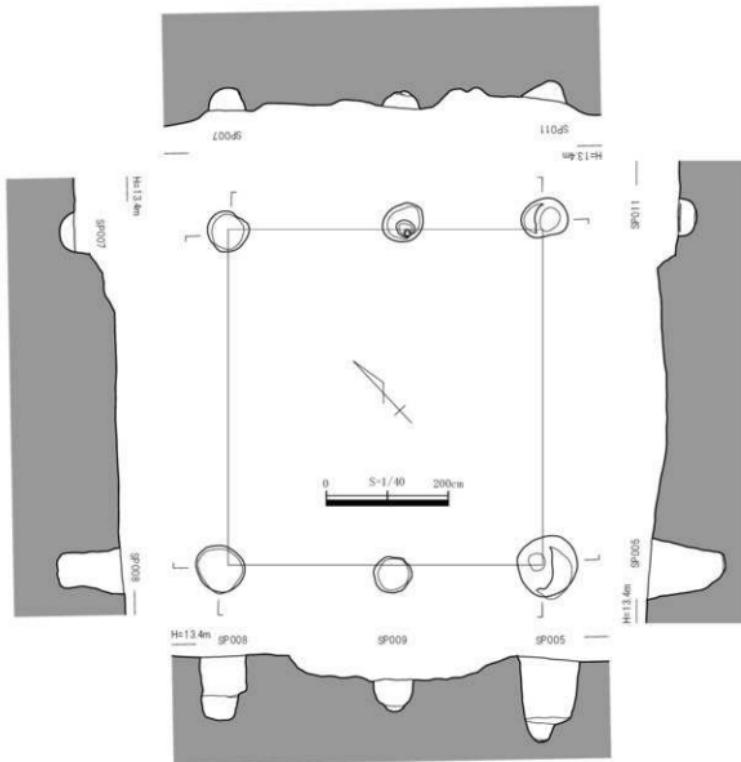
遺物は土器の小片がごく少量出土するのみで遺構の時期の特定はできないものの、埋土と出土する土器片から周辺遺構と同じ弥生時代終末期～古墳時代初頭頃と考える。



第9図 SC 003 出土遺物 (S = 1 / 4)

SB002 (第 11・12 図)

調査区南東側で検出した屋内棟持柱 (SP041) を持つ大型掘建柱建物である。建物は磁北を向き、今回検出した柱穴は梁行 2 間 × 桁行 3 間分、検出長は梁行 5.2 m、桁行 6.4 m を測る。検出した床面積は 67.5 m² であり、南側に対応する梁行の柱穴列が見られないことから、桁行は更に南側へ続くと考える。梁・桁の柱穴は直径 30 ~ 40 cm、柱の間隔は芯々で概ね 120 cm を測り、梁の柱穴掘方は桁のものより小規模である。SP037・038 は拡張区で検出したため遺構上面と柱痕のみ確認し、掘削は行つ



第10図 SB 001 (S = 1 / 40)

ていない。棟持柱SP041は長辺347cm、幅114cm、深さ150cm、柱痕の直径は55cmを測る。掘方は階段状の掘削により4段の平坦面を持つ。柱穴底部は柱の重みにより5cm沈下しており、他の柱穴と共に側板の使用は認められない。掘方は柱を据える際に鳥栖ロームを含む暗褐色土と黒褐色土で交互に埋めており、柱は建物廃絶時に抜き取られている。SP012は長辺191cm、幅109m、深さ75cmを測り、直径39cmの柱痕をもつ。SP013は長辺185cm、幅141cm、深さ75cm、柱痕は直径35cmを測る。SP037は長辺187cm、幅124cm、柱痕は直径43cmを測る。SP038は長辺170cm、幅130cm、柱痕は直径40cmを測る。SP039は長辺154cm、幅72cm、深さ79cm、柱痕は直径30cmを測る。SP040は長辺残存長70cm、幅72cm、深さ68cmを測る。掘方は全て階段状の掘削により1~3段のテラス面を持つ。

建物西辺のSP012・SP013・SP039には接近して直径28~34cm、深さ16~26cmの小規模な柱穴SP014・SP015・SP016が並ぶ。これらは建物に沿って等間隔に並列しており、SB002に関連する柱列と考えられる。

遺物は高环・甕などが出土した。SP041では掘方から弥生時代後期後半以降、柱抜穴から弥生時代

終末期の土器が出土しており、廃絶時期は弥生時代終末期、造営時期は弥生時代後期後半に遡りうる。遺物

16～18はSP012、19・20はSP013、21～27はSP041掘方、28～32はSP041柱抜穴から出土した。

16～18は甕。18は復元底径10.0cmを測る。19・20は甕。20は頸部から体部にかけて残存しており、頸部には断面三角形の突帯が1条めぐる。21・23～25は甕。21は復元口径16.0cm、復元頸部径12.6cmを測る。内外面をハケにより調整する。22は蓋。復元頸部径12.0cm、復元体部最大径16.4cmを測る。内外面を目の細かいミガキにより調整する。23は底径3.3cmを測り尖底に近い。24は頸部から体部にかけて残存する。25は底径約5.0cmを測り丸底に近い。外面は体部をハケ、底部付近をケズリ、内面はハケにより調整する。26は蓋底部。復元底径6.2cmを測る。27は高坪。坪部下部のみ残存する。28～30は甕。28は復元口径20.0cm、復元頸部径17.0cmを測る。外面をナデとタタキ、内面を口縁部をナデとケズリ、肩部を目の細かいハケにより調整する。体部に焼成後穿孔を有する。29は復元口径16.0cm、復元頸部径12.1cmを測る。外面をケズリ、内面をハケにより調整する。30は復元頸部径12.0cmを測る。内外面をハケにより調整する。31・32は高坪。31は復元口径29.8cmを測る。内外面をミガキにより調整する。32は復元口径25.0cmを測る。内外面を規則的な暗文状のミガキにより調整する。

3) 井尻B2号墳（第13～25図）

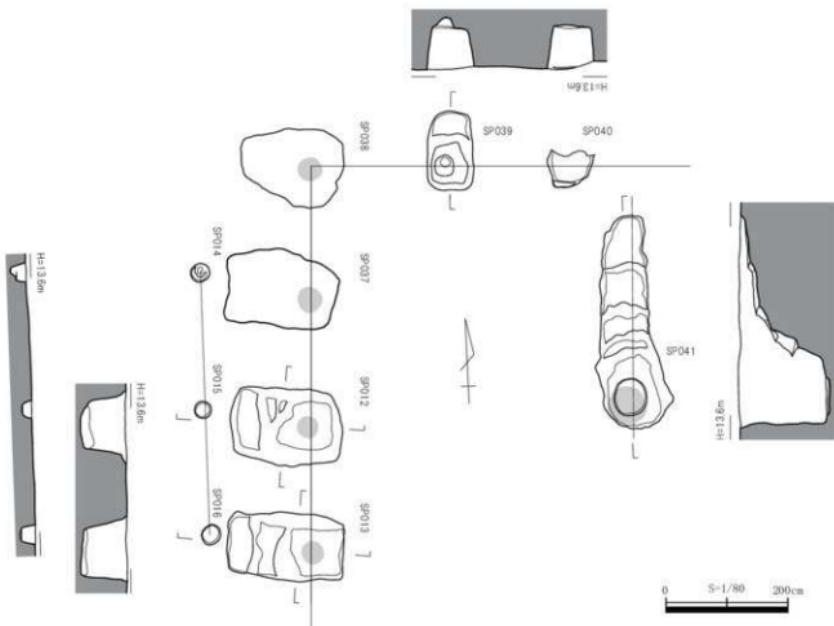
1区から2区にかけて古墳の周溝を検出した。拡張区に関しては遺構上面の確認のみ行った。周溝外周の直径23.9m、周溝内周の直径15.4mを測り、北西側に突出部をもつ。突出部は磁北から55°西方向に向き、最大幅4.8m、最小幅4.18m、検出長4.8mを測る。1・2区では鳥栖ローム層上面で遺構を確認したが、拡張区検出時、古墳周溝はローム上層の黒褐色土上から掘削されていることが判明した。周溝は突出部へ向かって次第に浅くなる。拡張区側では現況で幅60cm、深さ15cm以下のごく細い溝となって1区側に続くことが確認されたが、擾乱が深く、また1区掘削当初古墳との認識がなかったことから、1区で突出部の周溝は確認できていない。墳丘は全く残っておらず、本来墳丘があった平坦面ではSB002を検出していることから、墳丘は全て盛土により築造されていたと考えられる。周溝内には多数の花崗岩礫が含まれており、石室石材の可能性がある。この花崗岩は主に1区周溝外側で検出しており、花崗岩と共に長さ約2m×幅2mの扁平な礫が1点含まれていた。また、葺石は見られない。

遺物は埴輪のほか須恵器・土師器・鉄器が出土した。遺構の時期は古墳時代中期後半である。

遺物

遺物は須恵器、土師器、埴輪、鉄器が出土した。全て周溝内から出土しており原位置を留めず、土師器は全て小片である。埴輪は全て破碎しており、パンケース40箱ほど出土した。

33～50は須恵器である。33～37は坪蓋。33は復元口径13.8cm、残存高4.9cmを測る。外面体部中程に沈線がめぐる。34は口径13.0cm、器高4.5cmを測る。外面体部中程に段を有す。35は復元口径13.2cm、器高4.8cmを測る。36は復元口径12.4cm、残存高3.8cmを測る。外面体部中程に沈線がめぐる。37は頂部にヘラ記号を有する。38は蓋。ツマミ部分は径3.2cmを測る。39～43は坪。38は口径11.0cm、最大径13.2cm、器高4.8cmを測る。39は復元口径11.0cm、最大径14.0cm、残存高3.0cmを測る。40は復元口径11.6cm、最大径14.0cm、器高4.4cmを測る。41は口径11.0cm、最大径13.2cm、器高3.2cmを測る。42は復元口径11.2cm、残存高2.9cmを測る。43は口径11.6cm、最

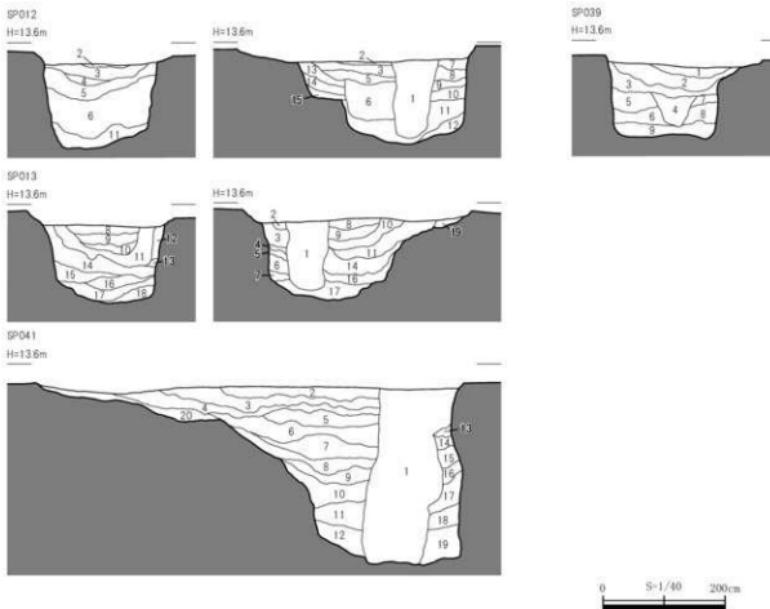


SP 012

- 暗褐色土 $\phi 0.5\text{mm}$ 以下の砂粒をごくわずかに含む。しまりは弱い。
- 黒褐色土 粘性がありしまりはない。しまりは弱い。
- 黒褐色土 粘性が強い鳥柄ローム粘土がブリックとなったものが多量に含まれる。粘性が強くしまりは弱い。
- 黒褐色土 粘性がありしまりはない。しまりは弱い。
- 根褐色粘質土 $\phi 1\text{cm}$ の鳥柄ロームブロック、粘性が強い鳥柄ローム粘土の隙間に黒褐色土を含む。しまりは弱い。
- 黒色土 $\phi 2\sim 5\text{cm}$ の鳥柄ローム粘土をわずかに含む。しまりは弱い。
- 黒色土 $\phi 2\sim 5\text{cm}$ の鳥柄ローム粘土をわずかに含む。第2層よりやや白味がある。しまりは弱い。
- 暗褐色土 $\phi 2\sim 3\text{cm}$ の鳥柄ロームブロックを少く中量含む。しまりは弱い。
- 黒褐色土 $\phi 1\text{mm}$ 1cm の鳥柄ロームブロックを少く中量含む。しまりは弱い。
- 黑褐色土 鳥柄ローム粘土を含まない。しまりは弱い。
- 黄褐色粘質土 鳥柄ロームブロックの間に黒褐色土を含む。しまりは弱い。
- 暗褐色土 しまりは弱い。
- 暗褐色土 層 12 以上黒味が強い。しまりは弱い。
- 黒褐色土 鳥柄ローム粘土を含まない。しまりは弱い。
- 黒褐色土 層 14 以上黒みが強い。しまりは弱い。
- 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む。粘性が強くしまりは弱い。
- 黒褐色土 ロームブロックを多量に含む。しまりは弱い。
- 黒褐色土 $\phi 2\sim 3\text{cm}$ の鳥柄ロームブロックを中量含む。しまりは弱い。

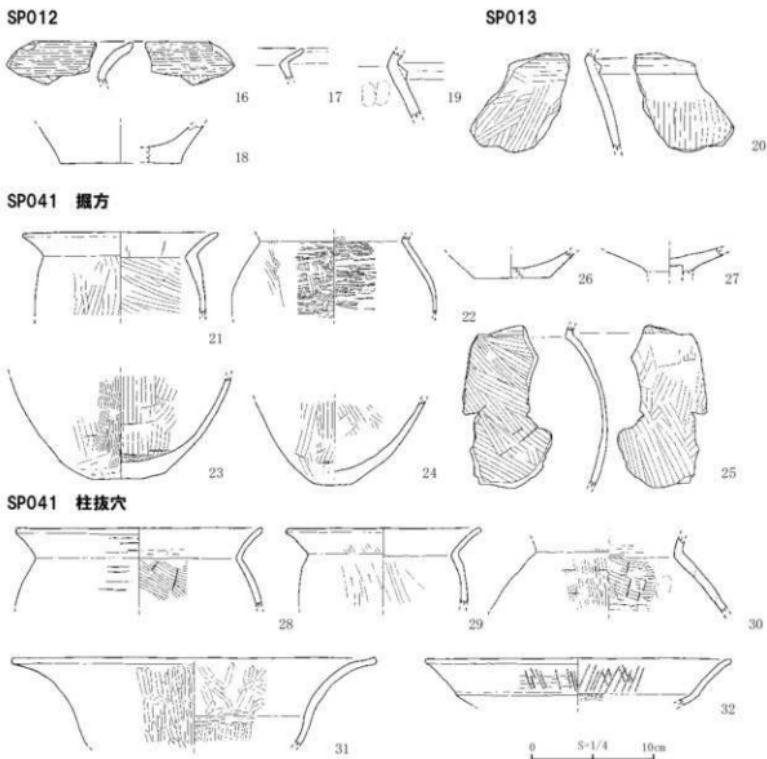
SP 013

- 暗褐色土 $\phi 2\sim 5\text{mm}$ の鳥柄ローム粘土を多量に含む。やや粘性があり、しまりは弱い。
- 黒褐色土 しまりは弱い。
- 暗褐色土 鳥柄ロームブロックを多量に含む。しまりは弱い。
- 黒褐色土 $\phi 0.5\sim 2\text{cm}$ の鳥柄ロームブロックを含む。しまりは弱い。
- 暗褐色土 鳥柄ロームブロックを多量に含む。しまりは弱い。
- 黒褐色土 $\phi 1\text{cm}$ の鳥柄ロームブロックを少量含む。しまりは弱い。
- 根褐色粘質土 鳥柄ロームブロックの隙間に黒褐色土を含む。粘性は非常に強い。しまりは弱い。
- 黒褐色土 やや灰褐色が強い。 $\phi 1\sim 5\text{mm}$ の鳥柄ローム粘土を中量含む。しまりは弱い。
- 黒褐色土 $\phi 0.5\sim 2\text{cm}$ の鳥柄ロームブロックを中量、 $\phi 1\text{m}$ 前後の鳥柄ローム粘土を多量に含む。しまりは弱い。
- 黒褐色土 $\phi 0.5\sim 1\text{cm}$ の鳥柄ロームブロックを鈍面に含む。しまりは弱い。
- 黒褐色土 鳥柄ロームを全く含めない。しまりは弱い。
- 黒褐色土 やや白味があり少量の暗褐色土をまだらに含む。しまりは弱い。
- 黒色土 $\phi 2\sim 3\text{mm}$ の暗褐色土を微量に含む。しまりは弱い。
- 暗褐色土 黒色土を少量含む。やや粘性が強く、しまりは弱い。
- 根褐色粘質土 粘性の強い鳥柄ロームに暗褐色土を中量含む。



- SP 040**
1. 黒褐色土 $\phi 1\text{ cm}$ 前後の鳥柄ロームブロックを中量含む。しまりは弱い。
 2. 緑褐色土 $\phi 1\sim 5\text{ cm}$ の鳥柄ロームブロックを中～多量に含む。しまりは弱い。
 3. 黒褐色土 $\phi 1\sim 5\text{ cm}$ の鳥柄ロームブロックを中量含む。しまりは弱い。
 4. 黒褐色土 $\phi 2\sim 5\text{ cm}$, 1~2cmの鳥柄ロームブロックを少量含む。しまりは弱い。
 5. 黒褐色土 鳥柄ロームを全く含まない。しまりは弱い。
 6. 黒褐色土 $\phi 1\sim 3\text{ cm}$, 1~3cmの鳥柄ローム粒を少量含む。しまりは弱い。
 7. 緑褐色土 $\phi 1\sim 3\text{ cm}$ の鳥柄ローム粒を少量含む。2層より鳥柄ロームの含有量は少ない。しまりは弱い。
 8. 黒褐色土 色調はやや明るい。しまりは弱い。
 9. 黄褐色粘質土 粘性の弱い鳥柄ロームに緑褐色土を少量含む。
- SP 041**
1. 黒褐色土 $\phi 0.5\sim 3\text{ cm}$ の鳥柄ローム粒を少量含む。上層に土器片が集まる。しまりは弱い。
 2. 緑褐色土 $\phi 1\sim 5\text{ cm}$ の鳥柄ローム粒を少量含み、 $\phi 0.1\text{ m}$ の鳥柄ローム粒を全体に薄く含む。しまりは弱い。
 3. 緑褐色粘質土 $\phi 5\sim 10\text{ cm}$ の鳥柄ロームブロックの隙間に $\phi 1\text{ mm}$ の鳥柄ローム粒、黒褐色土を多量に含む。しまりは弱い。
 4. 黒褐色土 $\phi 2\sim 3\text{ cm}$ の鳥柄ローム粒をごくわずかに含む。しまりは弱い。
 5. 緑褐色粘質土 $\phi 5\sim 10\text{ cm}$ の鳥柄ロームブロックの隙間に $\phi 1\text{ mm}$ の鳥柄ローム粒、黒褐色土を多量に含む。しまりは弱い。
 6. 黒褐色土 $\phi 10\text{ cm}$ の鳥柄ロームブロックを中量含む。柱状付近は細かな鳥柄ローム粒を多量に含む。しまりは弱い。
 7. 黑褐色土 $\phi 2\text{ cm}$ の鳥柄ロームブロック。 $\phi 5\text{ cm}$ の汚れた鳥柄ロームブロックをわずかに含む。しまりは弱い。
 8. 黑褐色土 $\phi 10\text{ cm}$ の鳥柄ロームブロックを中量含む。しまりは弱い。
 9. 黑褐色土 $\phi 1\text{ m}$ の鳥柄ローム粒をわずかに含む。しまりは弱い。
 10. 緑褐色粘質土 緑褐色土混じりの汚れた鳥柄ロームに $\phi 5\sim 10\text{ cm}$ の汚れた鳥柄ロームブロックを中量、黒褐色土を多量に含む。しまりは弱い。
 11. 黑褐色土 $\phi 1\text{ m}$ の鳥柄ローム粒をわずかに含む。しまりは弱い。
 12. 緑褐色粘質土 緑褐色土混じりの汚れた鳥柄ロームに $\phi 5\sim 10\text{ cm}$ の汚れた鳥柄ロームブロックを中量、黒褐色土を多量に含む。しまりは弱い。
 13. 黑褐色土 細かな鳥柄ローム粒を多量に含む。しまりは弱い。
 14. 黑褐色土 しまりは弱い。
 15. 黑褐色土 第14層より色調がや暗い。 $\phi 2\sim 3\text{ cm}$, 2cmの鳥柄ローム粒を少量含む。しまりは弱い。
 16. 黑褐色土 しまりは弱い。
 17. 緑褐色粘質土 緑褐色土混じりの汚れた鳥柄ロームに $\phi 5\sim 10\text{ cm}$ の汚れた鳥柄ロームブロックを中量、黒褐色土を多量に含む。しまりは弱い。
 18. 黑褐色土 $\phi 1\text{ m}$ の鳥柄ローム粒をわずかに含む。しまりは弱い。
 19. 灰褐色粘質土 鳥柄ロームに緑褐色粘質土が交ざったものを主体とし、 $\phi 1\text{ m}$, 2~3cmの汚れた鳥柄ロームブロックを中量含む。しまりは弱い。
 20. 緑褐色粘質土 鳥柄ロームに緑褐色土が交ざったものを主体とし、 $\phi 5\text{ mm}$ の汚れた鳥柄ローム粒を多量、 $\phi 2\text{ cm}$ の黒褐色土を少量含む。しまりは弱い。

第11図 SB 002 (S=1/80・土層断面は1/40)



第12図 SB 002 出土遺物 (S = 1 / 4)

大径 14.0cm、器高 4.7cm を測る。44～47は高杯。44は口径 11.0cm、最大径 12.4cm、脚部径 9.4cm、器高 11.2cm、脚部高 5.5cm を測る。脚部は3方に台形スカシをもつ。45は残存高 8.1cm、脚部高 5.5cm、底径 10.4cm を測る。脚部は3方に台形スカシをもつ。46は残存高 5.6cm、脚部高 5.4cm、底径 10.6cm を測る。脚部は3方に台形スカシをもつ。47は残存高 11.2cm を測る。脚部は2段のスカシをもち、上段のスカシは貫通しない。上下段のスカシの間に2条の沈線がめぐる。48は装飾付器台。脚部のみ残存する。2段の浮文がめぐり、円形、勾玉状のものが交互に配される。浮文の上下に波状文を施し、径 8mm の円形スカシは復元から 8箇所施される。49は・の頭部。上半に縦方向の沈線を施し、下部に2条の沈線、沈線以下に列点文を施す。50は壺。口径 14.4cm、器高 23.2cm を測る。胸部最大径から下年にかけてカキ目を施し、以下はケズリによって調整する。51は大甕。2区周溝内で破碎して出土した。復元口径 20.4cm を測る。外面を平行タタキにより調整し、内面は不明瞭な薄い同心円の當て具痕が残る。頭部にヘラ記号を有す。52は提瓶。復元頭部径 5.4cm、体部径 23.6cm、器高 15.0cm を測る。把手は先端が欠損する。外面は同心円状の細いカキ目を施し、内面を強い指才



等高線は傾丘部が5cm間隔、溝溝が10cm間隔とする

A - A'

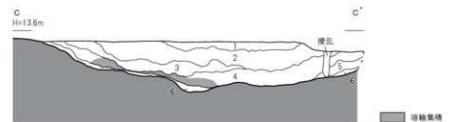
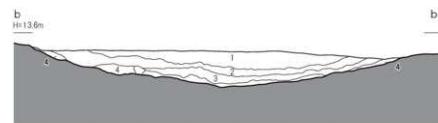
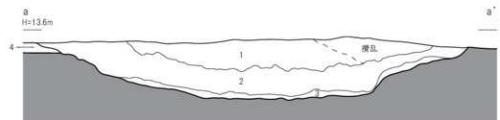
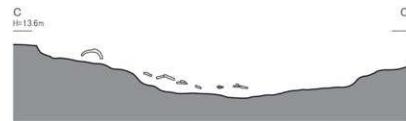
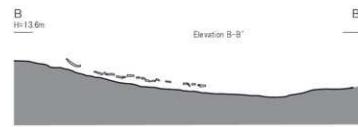
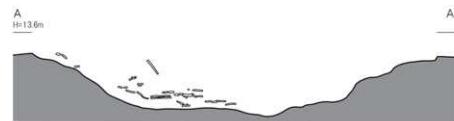
1. 塗覆色土 $\phi 1 \sim 20\text{mm}$ の鳥捨ローム粒を中心含む。やや粘性がありしまりは弱い。
2. 黒褐色土 $\phi 0.5\text{mm}$ の鳥捨ローム粒をわずかに含む。やや粘性がありしまりは弱い。
3. 塗覆色粘質土 鳥捨ロームに黒褐色土を少許含む。粘性が非常に強くしまりは強い。
4. 黑褐色土 $\phi 5 \sim 10\text{mm}$ の鳥捨ローム粒をわずかに含む。やや粘性がありしまりは弱い。

B - B'

1. 塗覆色土 やや明るい暗褐色土を中心～多量、 $\phi 1\text{m}$ の鳥捨ローム粒をごくわずかに含む。やや粘性がありしまりは弱い。
2. 黒褐色土 第1層に含まれるやや明るい暗褐色土を主とする。 $\phi 1 \sim 10\text{mm}$ の鳥捨ローム粒をわずかに含む。やや粘性がありしまりは弱い。
3. 黑褐色土 黒褐色が若干濃くなる。 $\phi 0.5\text{mm}$ の鳥捨ローム粒をごくわずかに含む。中程から東側にかけて埴輪を少量含む。やや粘性がありしまりは弱い。
4. 塗覆色土 第3層よりやや明るくおさげに粘性が弱い。 $\phi 0.1 \sim 0.5\text{mm}$ の暗褐色土。鳥捨ローム粒をわずかに含む。中程から東側にかけて埴輪を面状に多量に含む。
5. 稲穀色土 $\phi 5\text{mm}$ 粒粘粒が強い鳥捨ローム粒を多量に含む。ローラーの名前はまだらである。粘性がありややしまりがある。
6. 黄褐色粘質土 鳥捨ロームに塗覆色土を少量含む。粘性が非常に強くしまりは強い。

C - C'

1. 塗覆色土 $\phi 1 \sim 5\text{mm}$ の鳥捨ローム粒をわずかに含む。やや粘性がありしまりは弱い。
2. 黑褐色土 黒褐色が若干濃くなる。 $\phi 1 \sim 2\text{mm}$ の鳥捨ローム粒をごくわずかに含み、この層から埴輪の出土が目立ちはじめる。やや粘性がありしまりは弱い。
3. 塗覆色粘質土 $\phi 5\text{mm}$ 粒粘粒が強い鳥捨ローム粒を多量、 $\phi 1 \sim 3\text{mm}$ の暗褐色土をごくわずかに含む。埴輪の体積が集中する。
4. 黄褐色粘質土 鳥捨ロームに塗覆色土を少量含む。粘性が非常に強くしまりは強い。

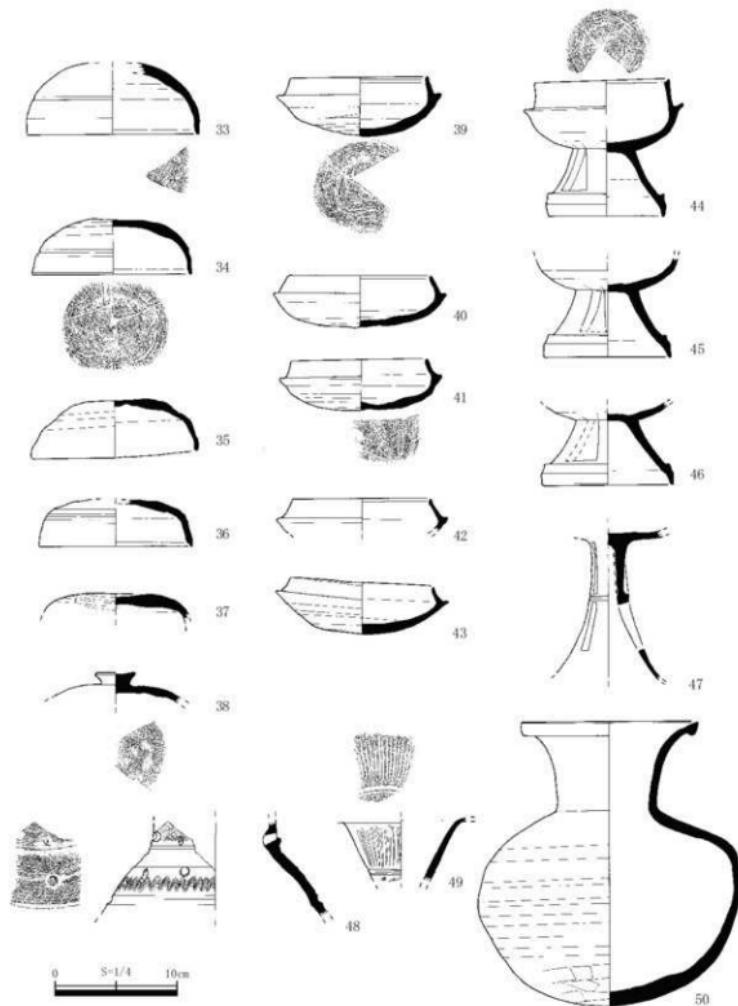


第13図 井戸B 2号墳 (S = 1/80・土層断面は 1/40)

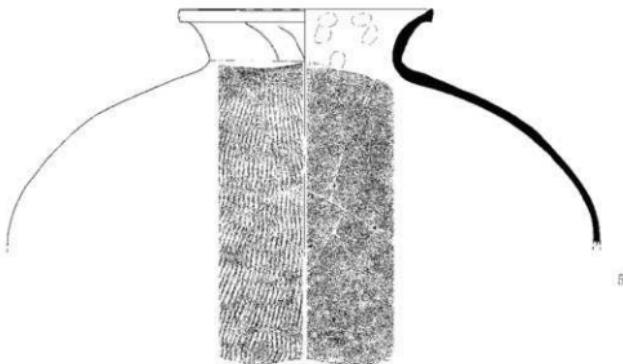
サエと指ナデにより調整する。

F 1～F 8は鉄器。1区北東の周溝内側で出土が集中した。F 1～F 5は長頸鎌。F 1は残存長4.8cmを測る。F 2は残存長11.8cmを測る。F 3は頸部で7.5cmを測る。F 4・5は茎部。F 4は残存長3.2cmを測る。F 5は残存長2.7cmを測る。鎌身を残す鉄鎌は全て柳葉形である。銹跡が激しく関節の形状は判別し得ない。また、F 2はX線により頸部から茎部にかけ段を有することが確認されたが、細部の様相は不明である。6は頂部が張り、残存長7.0cmを測る。F 7・8は馬具。いずれも杏葉か。F 7は3箇所に紙の痕跡を見て取れる。

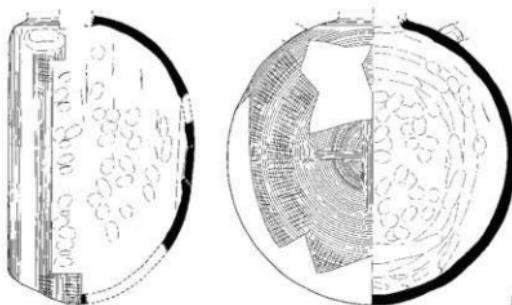
53～102は埴輪。53～66は円筒埴輪。53は復元口縁部径32.0cm、残存高17.0cm、最上段10.0cm、厚さ0.8～1.2cm、突帯は幅1.2cm、高さ0.8cmを測る。粘土帯の幅は2.0cm。54は復元径28.5～28.8cmを測る。円筒部3段分が残存しており、中段は高さ9.6cm、厚さ0.8～1.2cm、突帯は幅1.5cm、高さ0.8cmを測る。55は復元口径38.6cm、残存高25.6cm、最上段10.2cm、中段9.6cm、突帯は幅1.6～1.8cm、高さ0.8cmを測る。粘土帯は幅2.0cm。突帯は一部が剥離する。突帯下に工具による2条の沈線がめぐり、中段の突帯下部から約3cm上に同様の1条の浅い沈線が見られる。56は復元底部径21.2cm、残存高15.6cm、底部高10.8cm、厚さ1.0～1.2cmを測る。突帯は幅1.2cm、高さ0.8cm。粘土帯は幅1.8cm。57は復元底部径21.2cm、残存高13.6cmを測り、底部高10.8cm、厚さ1.0～1.2cmを測る。突帯は幅1.5cm、高さ0.8cm。2段目に復元径6.0cmの円形のスカシ孔をもつ。粘土帯は幅1.8～2.1cm。58は復元底径19.6cm、残存高20.8cm、底部高11.2cm、2段目9.2cm、厚さ0.3～0.8cm、突帯は幅1.4～1.6cm、高さ1.0～1.2cm。59は復元底部径22.6cm、残存高11.5cmを測り、底部高11.5cm、厚さ1.2～1.4cmを測る。突帯は幅1.8cm、高さ0.8cm。粘土帯は幅1.8cm。60は復元底部径24.0cm、残存高11.2cmを測り、底部高10.4cm、厚さ1.0～1.4cmを測る。突帯は幅1.6cm、高さ0.8cm。61は復元底径23.0cm、残存高27.6cm、底部高10.4cm、2段目突帯間隔11.0cm、粘土帯は幅1.0～1.2cm、高さ0.9cm。2段目に円形のスカシ孔をもち、復元径7.4cmを測る。62は復元底径24.0cm、残存高27.8cm、底部高11.2cm、2段目突帯間隔9.8cmを測る。突帯幅1.8cm、高さ0.8cm。粘土帯は幅1.6～2.0cm。63は復元底部径25.0cm、残存高12.9cm、底部高10.4cm、厚さ1.0～1.4cmを測る。突帯は幅1.4cm、高さ0.7cm。粘土帯は幅1.8cm。64は復元底部径25.1cm、残存高12.8cmを測り、底部高15.5cm、厚さ1.2～1.5cmを測る。突帯は全て剥離し、付帯位置には工具による2条の沈線があぐる。65は復元底部径29.9cm、残存高9.0cm、厚さ1.6cmを測る。66は復元底部径28.6cm、残存高22.4cm、厚さ1.2～1.8cmを測る。67・68は調整・胎土・突帯形状から同一個体と考える。いずれも上段は右下がりのナナメハケ、下段はタテハケ後二次調整でヨコハケを施す。68では3.5cm間隔の静止痕が見られる。突帯は低く、上下接合面を強いナデにより調整し、断面形は不整形な崩れたM字ないし丸みを帯びた低い三角形状を呈す。内の調整は摩耗により不明。69～76は朝顔形埴輪。69は復元口径48.8cm、残存高5.9cm、厚さ0.8～1.6cmを測る。70は復元口径61.2cm、残存高7.9cmを測る。71は残存高8.5cm、突帯は幅1.8cm、高さ1.0cmを測る。72は残存高19.8cm、くびれ部復元径10.2cm、胸部復元径27.8cm、厚さ0.7～1.3cm、突帯は幅1.2～1.6cm、高さ0.7～1.0cmを測る。73は残存高6.4cm、くびれ部復元径10.4cmを測る。74は残存高6.2cm、くびれ部径10.4cm、厚さ0.8～1.1cmを測る。くびれ部に付帯していた突帯は全て剥離する。75は残存高10.8cm、くびれ部復元径11.8cm、厚さ0.9～1.4cm、突帯の幅1.4cm、高さ0.6cmを測る。突帯は円筒部への撫付けが強く、付帯する粘土帯より細い突帯に整形される。76は残存高13.0cm、くびれ部復元径13.8cm、円筒部復元径39.2cm、厚さ1.0～1.2cm、突帯は幅1.2cm、高さ0.9cm、円形のスカシ孔をもち、復元径7.6cmを測る。粘土帯は幅2.0～2.4cm。77～91は家形埴輪。77～81



第14図 井戸B 2号墳周溝出土遺物① (S = 1 / 4)

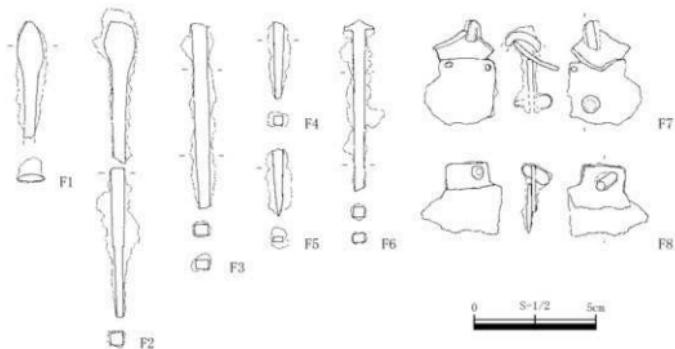


51



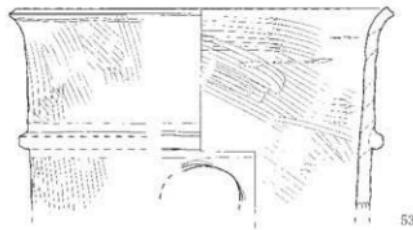
52

0 S=1/4 10cm

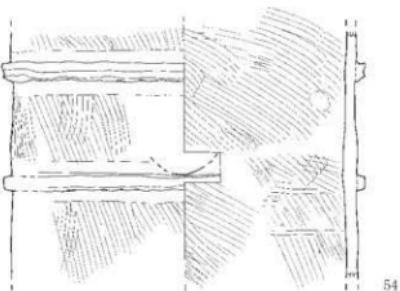


0 S=1/2 5cm

第15図 井戸B2号墳周溝出土遺物② (S=1/4・鉄器は1/2)



53



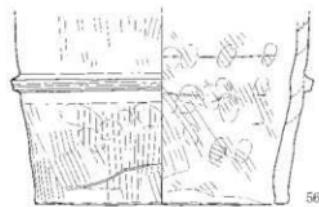
54



55

0 S-1/4 10cm

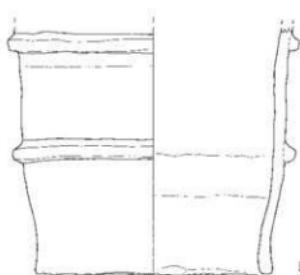
第16図 井尻B2号墳出土 嵌輪① (S = 1 / 4)



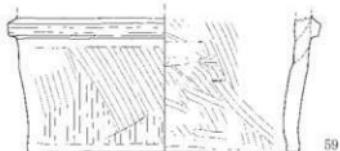
56



57



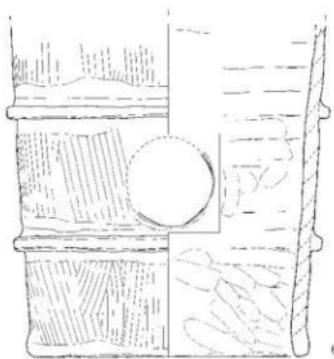
58



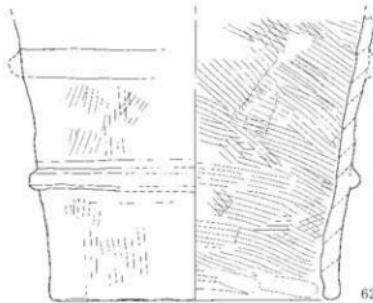
59



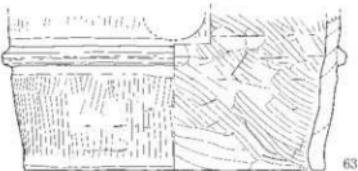
60



61



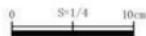
62



63



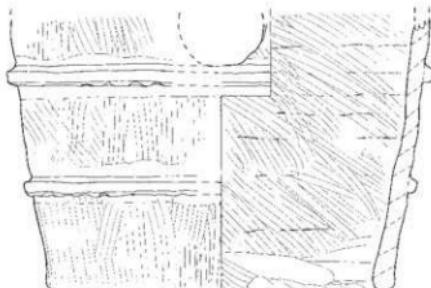
64



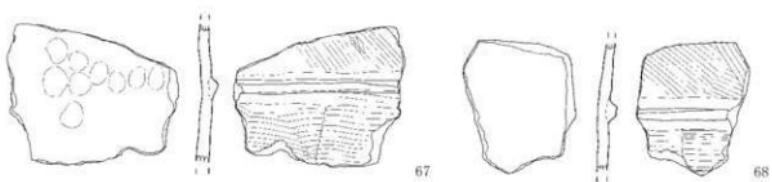
第17図 井尻B 2号墳出土 墓輪② (S = 1 / 4)



65



66

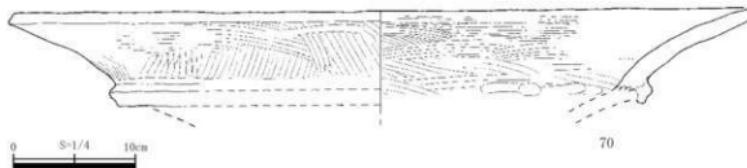


67

68

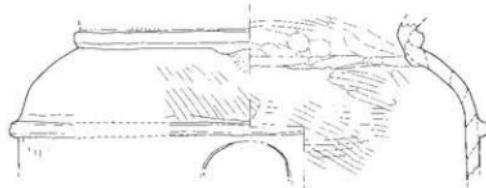
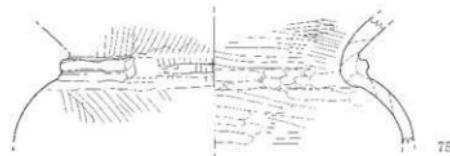
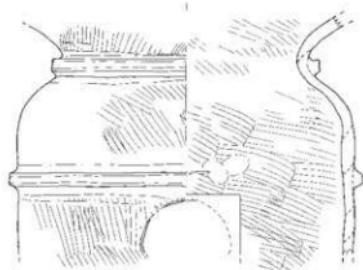


69



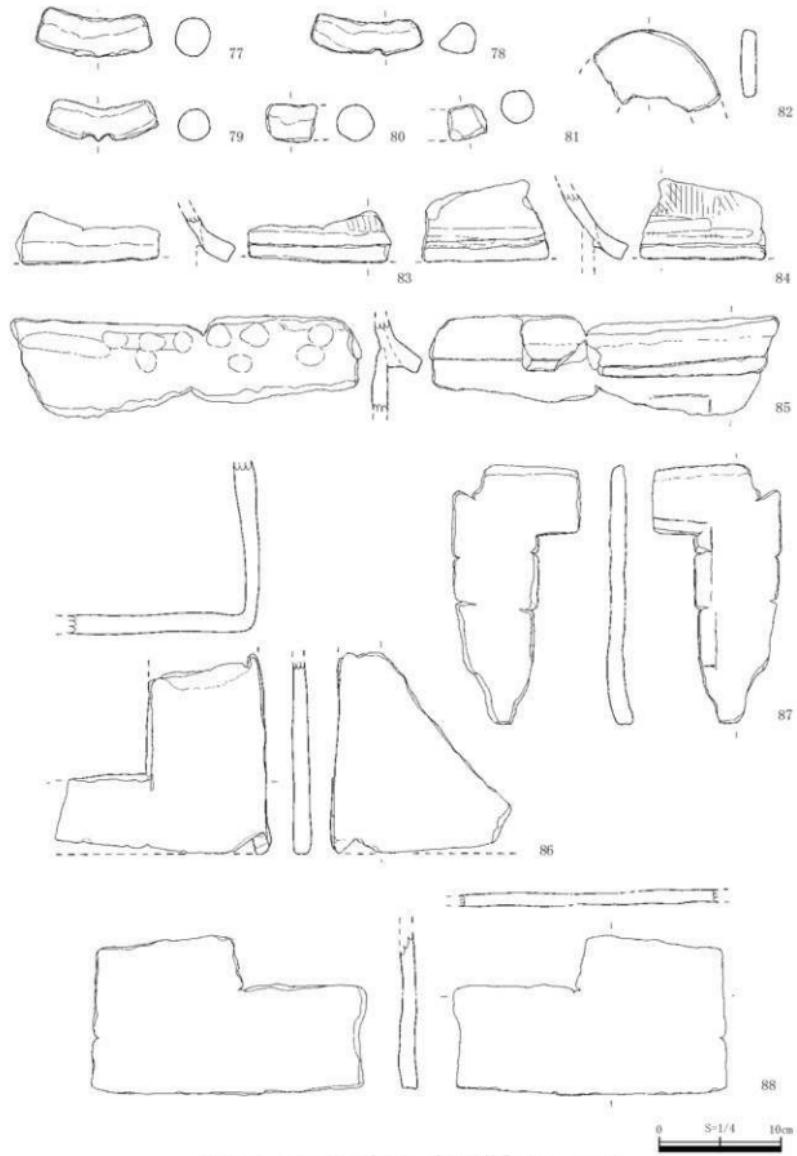
70

第18図 井戸B2号墳出土 墳輪③ (S = 1 / 4)

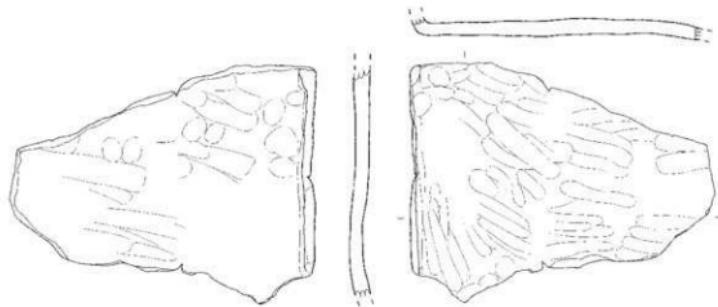


0 S=1/4 10cm

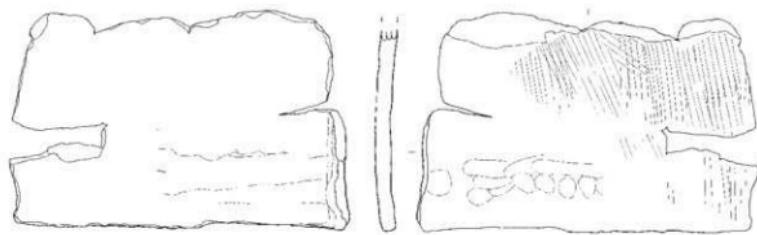
第19図 井戸B 2号墳出土 墳輪④ (S = 1 / 4)



第20図 井尻B 2号墳出土 家形埴輪① (S = 1 / 4)



89



90

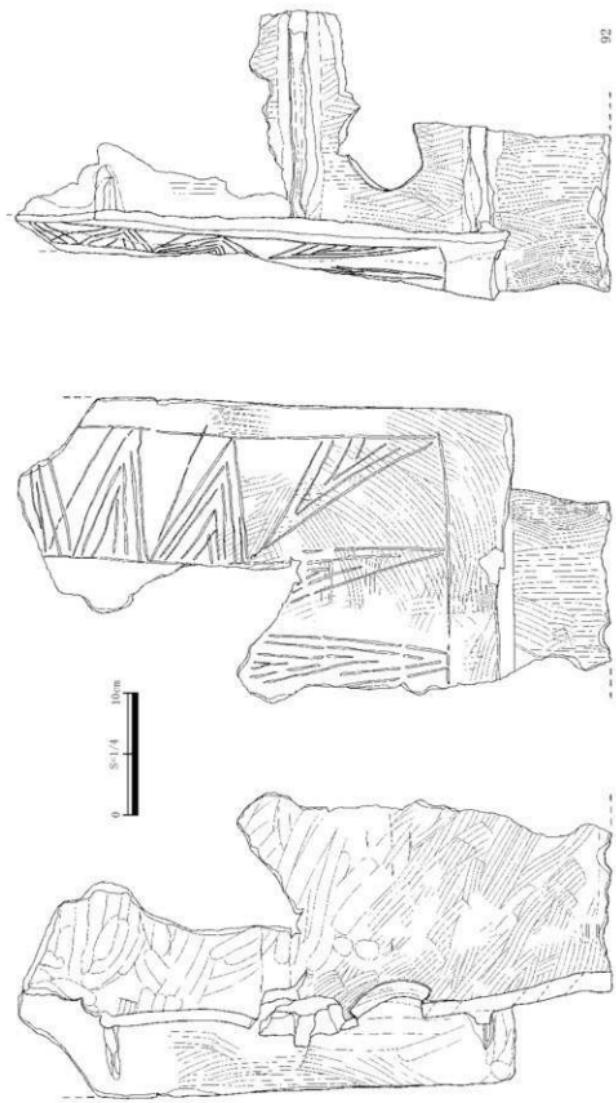
0 S=1/4 10cm

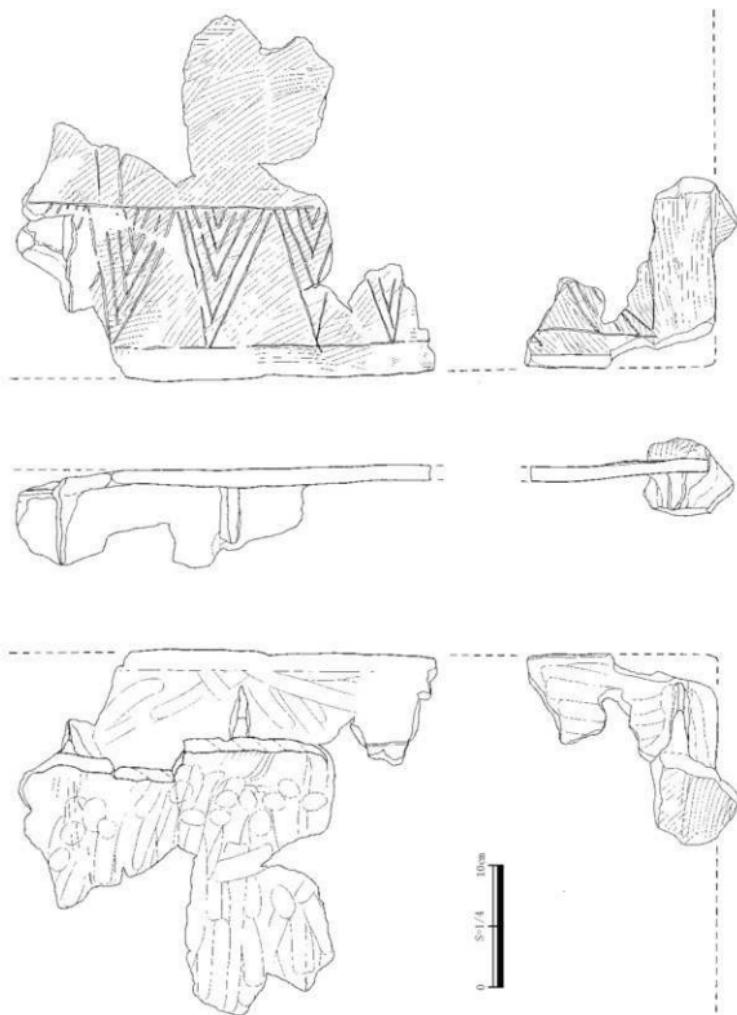


91

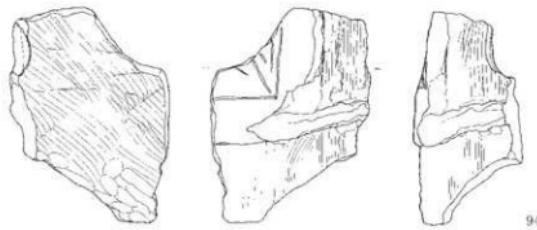
第21図 井尻B 2号墳出土 家形埴輪② (S = 1 / 4)

第22圖 井尻B 2号墳出土 肩形埴輪① ($S = 1 / 4$)



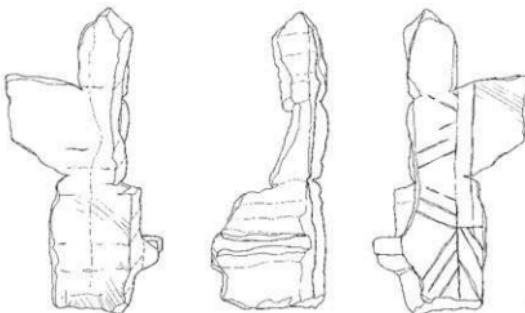
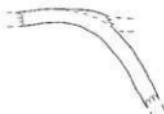


第23図 井戸B 2号墳出土 屢形埴輪② (S = 1 / 4)

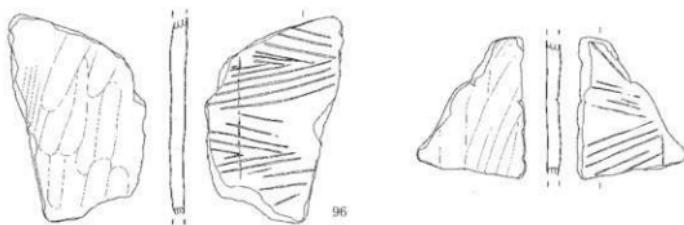


94

0 S=1/4 10cm

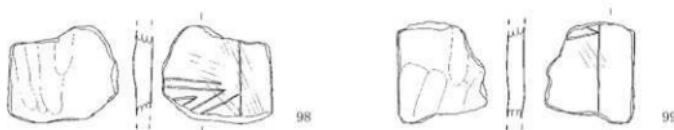


95



96

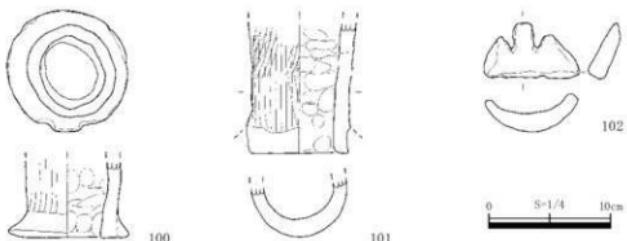
97



98

99

第24図 井尻B 2号墳出土 盾形埴輪③ (S = 1 / 4)



第25図 井戸B-2号墳出土 その他の埴輪 (S = 1 / 4)

は軽木。76～78は下部に屋根との接合痕跡とみられる2箇所のくぼみをもつ。77は長さ9.6cm、直径2.1～2.7cm。78は長さ9.2cm、直径2.0～2.5cm。79は長さ9.2cm、直径2.2～2.4cm。80は残存長4.2cm、直径約2.9cm。81は残存長3.2cm、直径約2.5cm。82は破風か。83～85は屋根。83は内側上部に幅3.0cmの剥離面を持つ。底長2.4cmを測る。84は底内側の中程に幅1.8cmの剥離面を持つ。底長3.0cmを測る。85は残存幅28.4cm、底長2.4cm、底は壁に約42°で取り付く。屋根は壁の粘土板に薄い粘土板を傾斜して貼り付け、その上から底部部分を貼り付けることで成形する。86～91は壁。86は壁2辺と入口が残存する。残存高16.4cm、左壁残存幅17.3cm、右壁残存幅14.4cm、厚さ1.2～1.3cmを測り、入口は右側辺8.4cm、下辺6.5cmが残存する。壁底部はわずかに外反する。87は底部から屋根接合部まで残存する。高さ21.2cm、厚さ1.1～1.5cmを測り、入口は上辺3.3cm、右側辺10.3cmが残存する。屋根接合部分は薄く帯状に剥離し、壁底部は外反する。入口外周に線刻がめぐる。88は残存高13.2cm、残存幅22.4cm、厚さ0.9～1.2cmを測る。壁底部はわずかに外反する。89～90は左側に壁のかどが残る。89は残存高19.8cm、残存幅24.9cm、厚さ1.1～1.4cmを測る。90は残存高18.1cm、残存幅28.4cm、厚さ1.2～1.3cm、壁底部はわずかに外反する。91は残存高18.3cm、左壁残存幅14.3cm、右壁残存幅27.9cm、厚さ1.2cm。壁の角は右側の壁面内側を左側の壁端部に重ね、内側に厚さ6mm程粘土を充填して接合する。92～99は盾形埴輪。いずれも円筒部前面左右に粘土板を付帯し、円筒部の突堤延長上に粘土を充填することで盾部を支え、接合する。92は残存高48.8cm、復元底径24.0cm、復元底径から、盾部は復元幅38.8cmを測る。円筒部は厚さ1.2cmを測り、2段目に径5.7cmの円形のスカシをもつ。盾部の粘土板は幅9.7cm、厚さ0.6～1.0cmを測り、鋸歯文は4～5重。93は円筒部の厚さ0.9～1.2cm、盾部の粘土板は幅11.4cm、厚さ1.2～1.5cmを測る。鋸歯文は4～5重。内区下部に2条の線刻が横断する。94は残存長17.5cm、円筒部は厚さ1.3cm。円筒部と盾部の粘土板の境に線刻が見られる。接合位置設定にともなうものの可能性がある。95は残存長24.6cm。外区角の施文は91～93と異なり、内側の縦線2重であり、1本は内区外に縱断する。96～99は盾部片。厚さ1.0～1.3cmを測る。96は最低6重の鋸歯文を施し、鋸歯文に線刻が縦断する。97～99は盾側辺である。100～102は形象埴輪片。100は底径10.0cm、筒部径7.9cm、残存高7.2cm、厚さ1.0cmを測る。底部に粘土帶を貼りつけ裾を形成する。動物埴輪等の脚部か。101は復元径7.9～8.8cm、残存高10.6cm、厚さ1.2cmを測る。下部に幅2cm程の剥離面があり、形状や調整、規格は100に類似する。101は幅7.8cm、高さ4.5cmを測る。上辺に2か所の切り込みを入れ、「山」字状を呈す。

遺物番号	器種	外面調整		内面調整	突部	色調	胎土
		1次	2次				
53	円筒(口縁)	タテハケ	-	ヨコ・ナナメ	台形	7.5YR7/6	φ0.1mmの雲母微量 雲母粒を含まない
54	円筒(胴)	タテ	-	ヨコ・ナナメ	台形～M字	7.5YR7/6	φ0.1～0.5mmの白色砂粒多量 φ0.1mmの雲母を殆ど含まない
55	円筒(口縁)	タテ	-	ヨコ・ナナメ	不整形台形	7.5YR8/8	φ2mmの石英粒微量 φ0.1mmの雲母を殆ど含まない
56	円筒(底)	タテ	-	ナナメ	台形	5YR7/8	雲母粒を殆ど含まない φ1～2mmの石英粒少量
57	円筒(底)	タテ	-	ナナメ	台形	10YR7/6	雲母粒を殆ど含まない φ1～3mmの石英粒多量
58	円筒(底)	タテ	-	摩滅	台形	10YR8/6	φ0.1mmの雲母粒微量 雲母粒を含まない
59	円筒(底)	タテ	-	ナナメ	台形	5YR7/8	雲母粒を含まない φ1～3mmの石英粒小量
60	円筒(底)	タテ	-	摩滅	台形	10YR7/8	雲母粒を殆ど含まない φ1～4mmの石英粒多量
61	円筒(底)	タテ	-	摩滅	台形	5YR7/6	雲母粒多量 φ1～3mmの石英粒多量
62	円筒(底)	タテ	-	ヨコ・ナナメ	台形	5YR7/8	φ0.1mmの雲母粒多量 φ1～3mmの石英粒中量
63	円筒(底)	タテ	-	ナナメ	台形～M字	5YR7/8	φ0.1mmの雲母粒小量
64	円筒(底)	タテ	-	ナナメ	-	5YR7/6	φ0.1mmの雲母粒微量
65	円筒(底)	タテ	-	ナナメ	-	7.5YR8/8	φ1～4mmの石英粒小量 雲母粒を殆ど含まない
66	円筒(底)	タテ	-	ナナメ	台形	5YR7/6	φ1～3mmの石英粒多量 雲母を殆ど含まない
67	円筒	タテ	ヨコ	摩耗	扁平三角形	7.5YR8/6	φ1～3mmの石英粒微量
68	円筒	タテ	ヨコ	摩耗	扁平略M字	7.5YR8/6	雲母を含まない φ1～3mmの石英粒小量
69	朝顔(笠)	笠	ヨコハケ・タテ	-	ヨコ・ナナメ	-	φ0.1mmの雲母粒多量 φ1～5mm石英粒中量
70	朝顔(笠)	笠	ヨコ・タテ	-	ヨコ・ナナメ	台形～M字	5YR7/8
71	朝顔(笠)	笠	タテ	-	ヨコ・ナナメ	台形	5YR7/8
72	朝顔(笠～円筒)	笠	タテ	-	ヨコ・ナナメ	台形	5YR7/8
73	朝顔(笠～円筒)	笠	タテ	-	ヨコ・ナナメ	M字	5YR7/8
74	朝顔(笠～円筒)	摩滅	-	-	-	5YR7/6	φ0.1mmの雲母粒少量 雲母を殆ど含まない
75	朝顔(笠～円筒)	笠	タテ	-	ヨコ・ナナメ	台形	5YR7/8
76	朝顔(笠～円筒)	笠	タテ	-	ヨコ・ナナメ	台形～M字	5YR7/8
77	家(籠木)	ナデ	-	-	-	7.5YR8/8	φ0.1mmの雲母粒少量 φ1～3mmの石英粒小量
78	家(籠木)	ナデ	-	-	-	7.5YR8/8	雲母を含まない φ1～3mmの石英粒小量
79	家(籠木)	ナデ	-	-	-	7.5YR8/8	雲母を含まない φ1～3mmの石英粒小量
80	家(籠木)	ナデ	-	-	-	7.5YR8/8	雲母を含まない φ1～3mmの石英粒小量
81	家(籠木)	ナデ	-	-	-	7.5YR8/8	雲母を含まない φ1～3mmの石英粒中量
82	家(籠風)	ナデ	-	-	-	10YR7/6	雲母を殆ど含まない φ1～3mmの石英粒小量
83	家(屋根)	タテ	-	ナデ	-	10YR7/6	雲母を含まない φ1～3mmの石英粒を少量
84	家(屋根)	タテ	-	ナデ	-	10YR7/6	雲母を含まない φ1～3mmの石英粒多量
85	家(屋根)	摩滅	-	ナデ・オサエ	-	10YR7/6	雲母を含まない φ1～3mmの石英粒小量

遺物番号	器種	外面調整		内面調整	突堤	色調	胎土
		1次	2次				
86	家(壁)	摩滅	—	摩滅	—	10YR8/6	雲母を含まない φ1~3mmの石英粒多量
87	家(壁)	摩滅	—	摩滅	—	10YR7/6	雲母を含まない φ1~3mmの石英粒小量
88	家(壁)	摩滅	—	摩滅	—	10YR8/6	雲母を含まない φ1~3mmの石英粒多量
89	家(壁)	摩滅	—	ナデ・オサエ	—	10YR7/6	φ1~3mmの石英粒小量
90	家(壁)	タテ・ナナメ	—	摩滅	—	10YR7/6	雲母を殆ど含まない φ1~3mmの石英物多量
91	家(壁)	タテ・ナナメ	—	ナデ・オサエ	—	10YR7/6	雲母を殆ど含まない φ1~3mmの石英粒多量
92	盾(盾・円筒)	タテ	—	ナナメ	—	5YR7/8	雲母を含まない 胎土細かい
93	盾(盾・円筒)	ナナメ	—	タテ・ナナメ	—	10YR7/8	雲母粒を殆ど含まない φ1~5mmの石英粒小量
94	盾(盾)	摩滅	—	ナナメ	—	7.5YR7/8	雲母は殆ど含まない
95	盾(盾)	摩滅	—	ナナメ	—	7.5YR7/8	φ1~3mmの石英粒中量
96	盾(盾)	ナナメ	—	ナデ	—	10YR7/6	雲母を含まない φ1~3mmの石英粒多量
97	盾(盾)	ナナメ	—	ナデ	—	10YR7/6	雲母を含まない φ1~3mmの石英粒小量
98	盾(盾・円筒)	盾 タテ・ヨコ・ナナメ 円筒 タテ	—	盾(縁) タテ 円筒 ナナメ	—	10YR7/6	雲母を殆ど含まない φ1~3mmの石英粒ごく微量
99	盾(盾・円筒)	盾 タテ・ナナメ 円筒 タテ	—	円筒 ヨコ・ナナメ	—	10YR7/6	雲母を含まない φ1~3mmの石英粒中量
100	形象埴輪	タテ	—	ナデ・オサエ	—	10YR7/6	
101	形象埴輪	タテ	—	ナデ・オサエ	—	10YR7/6	
102	形象埴輪	摩滅	—		—	10YR7/6	

IV.まとめ

1. 大型掘立柱建物 (S B 002)

調査区東側で屋内に棟持柱を持つ大型の掘立柱建物の一部を検出した。建物規模の復元を試みると、外周の柱穴と棟持柱の位置関係から棟持柱が梁行の中央に位置すると仮定した場合梁行は4間、桁行は少なくとも調査区外に続くことから5間以上となり、想定される床面積は90 m²を越える規模となる。SB002 前後に建直しの痕跡は全く見られない。柱穴掘方出土の土器は弥生時代後期後半のものが含まれ、SP041 の柱抜穴からは弥生時代終末期のものが出土していることから、建物造営時期は弥生時代後期後半に遡りうる。SP041 の柱抜穴からは弥生時代終末期の土器が出土しており、また建物内には古墳時代初期に廃絶した堅穴住居 SC003 が重複することから、弥生時代終末期、少なくともSC003 建設以前に SB002 は廃絶していたと考える。遺跡全体で見ると既往の調査で同様の棟持柱を持つ大型建物の検出例は無く、立地は井戸B 遺跡が広がる台地の最高所（現地緑神社付近）に接する。このことから S B 002 は、機能は不明だが集落全体で標高が最も高い地帯に意識的に建てられた特別な意味合いを持つ建物と考える。

2. 井戸B 2号墳

井戸B 1号墳から北西方向に175 mの地点で円形の墳丘の西側に突出部をもつ古墳を1基検出した。突出部は攪乱を受けており不明瞭な部分が多いものの、2区拡張区においてごく浅い突出部外周

をめぐる周溝の続きを確認しており陸橋とは異なるものと考える。今回検出し調査を行ったのは古墳全体の3分の1に満たない程度であり、周溝の全体像は把握できていないことから今回は墳形を確定しないこととした。

須恵器はTK23型式期、MT15～TK10型式期、TK43～TK209型式期の3期に分けられ、造営後追葬と墓前祭祀が行われていた事が見て取れる。TK23型式期には高坏、MT15～TK10型式期には坏と坏蓋、TK43～TK209型式期には坏と坏蓋、高坏などが出土し、時期によって主体となる器種が異なる。

副葬品は鉄器が出土しており、鐵と馬具等が確認できる。いずれも鏽跡が激しく不明瞭な点が多いため、鉄器から時期を認定することは困難である。

埴輪は原位置を留めておらず、周溝内から円筒埴輪、朝顔形埴輪、家形埴輪、盾形埴輪、その他形象埴輪が出土した。色調は浅黄橙色・黄橙色・橙色からなり、浅黄橙色の個体は雲母粒・石英粒の含有量が少なく、黄橙色、橙色の個体は雲母粒・石英粒の含有量に量差があるなど、複数種の胎土が見て取れる。全ての埴輪において黒斑は見られず、窯窓によって焼成される。円筒埴輪は底部から口縁部にかけて全体を復元できるものが無く段数は不明である。復元底径は約21～25cm、29cm、底部高は9.8～11.2cm、突帯間隔は9.2～10.5cmを測る。細部の特徴は異なる胎土間でも概ね共通した特徴を示しており、口縁に沈線がめぐり、突帯間隔は口縁部とは異なる浅く薄い沈線により設定する。突帯は下辺に連続的に押しつけた接合痕を残し、突帯断面形は躍んだ台形かM字を呈す。2段目以降に円形のスカシを施し、外側調整は67・68を除いて一次調整のタテハケのみである。底部調整はなく、底面に指もしくは棒状のものによる瘤みをもつ個体がある。家形埴輪片は壁のかどを有する破片が4片、入り口を有する破片が3片出土した。胎土は明黄橙色～黄橙色で全て類似しており、復元はできなかったものの同一個体である可能性も考えられる。破片から復元を試みると、壁の高さは21.2cmであり、外周に線刻表現を持つ入口を有す。屋根は破風をもつ切妻式であり、頂部には堅魚木を載せる。盾形埴輪は盾の角が残る破片から、最低4個体確認できる。胎土は明黄橙色～橙色を呈し、全て円筒埴輪前面の左右に粘土板を接合して盾部を作る。鋸歯文の表現は内区模様、鋸歯文を重ねる数など個体によって異なる。特に盾形埴輪96や98は鋸歯文の左右の辺の数が対応しない、下書きの様な別方向の線が多数みられるなどや施文に雑な印象を受ける。また、円筒部は胎土、一次調整タテハケのみなど類似するものの、底部高が11.6cm、突帯間隔は14.6cmと高く、突帯の上下辺を丁寧に撫で付けるなど、円筒埴輪とやや異なる様相を呈す。円筒埴輪の特徴から、井尻B2号墳出土の埴輪は川西編年IV期に該当する。以上の出土した遺物から、井尻B2号墳の造営時期は古墳時代中期後半であり、井尻B1号墳より後出すことが明らかとなった。

3. 小結

今回の調査では、弥生時代終末期から古墳時代中期にかけた当地の利用状況が明らかとなった。当調査地で出土した最も古い遺物はSC001で出土した刻目突帯文土器である。同時期の遺構は見られず、また同時期の遺物は主に遺跡北側で確認されているものの、弥生時代前期に当地周辺でも人々の活動があった可能性がある。遺構を検出するのは弥生時代終末期以降であり、遺構は大型掘立柱建物(SB002)からなる。調査地内では同時期の竪穴住居といった一般的な生活遺構が見られず、遺跡内で特異な場として機能していた可能性がある。SB002廃絶後、古墳時代前期初頭には生活城として複数の竪穴住居が建てられる。その後古墳時代中期中頃まで当地の利用は確認されず、古墳時代中期後半になると井尻B1号墳に後続する井尻B2号墳が造営され、当地一帯は墓域として機能することとなる。



(1) 1区全景（北西から）



(1) 2区全景 (北西から)



(1) SC 001 (東から)



(2) SC 002 (東から)



(3) SC 003 (西から)



(4) SC 004 (北から)



(5) SB 01 全景 (東から)



(6) SB 02 全景 (北から)



(7) SP 012・013・015・016 検出状況 (東から)



(8) SP 041 掘方と柱痕 (東から)



(1) SP 041 土層断面（西から）



(2) 作業風景 1 区検出（東から）



(3) 作業風景（北から）



(4) 1 区周溝内花崗岩検出状況（北西から）



(5) 1 区周溝埴輪検出状況（南東から）



(6) 2 区周溝埴輪検出状況（北から）



(7) 盾形埴輪検出状況（北から）



(8) 家形埴輪 83 検出状況（北西から）



(1) 出土遺物 ①



53



56



61



63



66



67 · 68



円筒埴輪口縁部



粘土帶接合痕

(1) 出土遺物 (2)



70

75



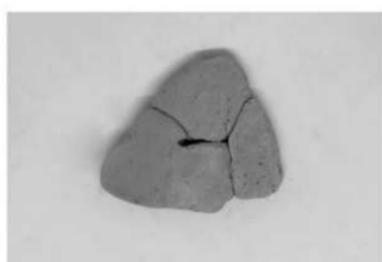
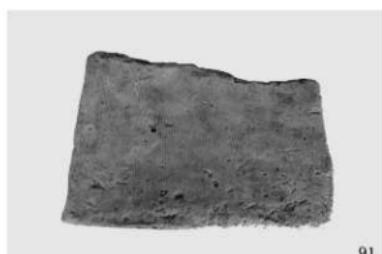
76

77 • 78 • 79



85

(1) 出土遺物 ③



(1) 出土遺物 ④



92-1



92-2



93



94-1



94-2

(1) 出土遺物 ⑤

報告書抄録								
ふりがな	いじりBいせき28							
書名	井尻B遺跡28							
副書名	—井尻B遺跡第45次調査報告—							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第1438集							
編著者名	三浦 悠葵							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8番1号							
発行年月日	2022年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード						
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 m ²	発掘原因
いじりBいせき 井尻B遺跡	ふくおかしこんく ふくおかしみなみく 福岡県福岡市南区 いじりBいせき28番10 井尻5丁目234番10	40134	0090	33° 33' 5.55"	130° 26' 27.89"	20200114 ～ 20200331	326.9	記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
井尻B遺跡	集落	弥生時代～古墳時代	堅穴住居・掘立柱建物・ 古墳	弥生土器・土師器・ 須恵器・埴輪・鉄器				
要約	<p>第45次調査では、掘立柱建物跡、堅穴住居跡、古墳1基を検出した。掘立柱建物S B002は屋内に棟持柱をもつ弥生時代終末期の大型建物である。堅穴住居SC001・003は古墳時代前期初頭、井尻B2号墳は古墳時代中期後半に属し、古墳は墳丘が全て消失しており、検出されたのは全体の3分の1程度であり、北西に突出部を設ける。周溝内から埴輪、須恵器、土師器、少量の鉄製品が出土している。</p> <p>本調査は弥生時代終末期まで特殊な場として機能し、古墳時代前期初頭に集落が展開、一時断続を経て古墳時代中期後半には井尻B1号墳に続く井尻B2号墳が造営され墓域として機能した事が判明した。</p>							

